

中近世移行期の『鉄炮之大事』・『南蛮流秘伝一流』にみる技術と呪術 井原今朝男

Technology and Magic as Seen in the "Teppo no Daiji" and "Nanban School Book of Secrets" from the Period of Transition in the Middle of the Early Modern Period

はじめに

- ①史料翻刻
- ②『鉄炮之大事』の考察
- ③『南蛮流秘伝一流』の考察

【論文要旨】

本稿は、あらたに発見された長野市の守田神社所蔵の新史料『鉄炮之大事』とセットで伝来した『南蛮流秘伝一流』の史料を翻刻・紹介するとともに、中世における技術と呪術の相関関係を考察したものである。

第一に、『鉄炮之大事』は、天正十九年から、文禄三年、文禄五年、慶長十年、元和元年までの合計十五点の文書群である。これまで最古とされる永禄・天正期の火薬調合次第とはほぼ同時代のものから、文禄・慶長・元和という江戸初期への移行期までの変遷を示す史料としては、稀有な史料群である。しかも、これまで知られている大名家と契約をとりかわした炮術師の炮術秘伝書よりも古い史料群であり、民間の地方寺社に相伝された修験者の鉄炮技術書としては、最古ではじめての文書群である。

第二に、『南蛮流秘伝一流』は『鉄炮之大事』とセットで相伝されたもので、その内容は南蛮流炮術の伝書ではなく、戦傷者などの治療技術を記載した医書である。鉄

炮の技術と医術とがセットで相伝・普及されたことが判明した。傷の治療法として縫合術や外科手術法が相伝されており、内容的にポルトガル医学だけではなく、室町期に日本で独自に発達した金瘡医学の要素が強く、両者の混在を指摘した。

第三に、『鉄炮之大事』『南蛮流秘伝一流』には、火薬調合や膏薬製造など技術的薬学的知識が、呪法や作法によって神秘化・儀礼化され、呪術的性格をあわせもっていた。実践的戦闘法として活用された戦国期に近い天正・文禄年間ほど、技術的要素が濃厚であり、慶長・元和年間の近世社会になるほど、呪術的性格を強化しているという逆転現象を指摘した。

はじめに

中世社会を近代的解釈によって理解するのではなく、中世人の視点からありのままに認識してその時代的特質をあきらかにしようとするとき、技術と呪術の未分離という問題に直面せざるをえない。前近代社会における商業・経済活動が呪術的性格を濃厚にもっていたことは、勝俣鎮夫・桜井英治らによってあきらかにされた。¹⁾ 中世において技術と呪術、宗教と技術とが未分離であったことは平雅行が指摘している。問題は、両者の相関関係や結合状態をあきらかにすることである。拙著では、中世寺院が国家統合機能を持ち、民衆統合を推進する中で、音楽・芸能・医療や土木・農業技術などの技術改良や普及に一定に役割を果たしたと、とりわけ、中世寺院の世俗化の中で、法会や祈祷による国家安穩・五穀豊穡の実現という国家的呪術的イデオロギーを批判し、生病老死を人間の必然苦として受容し報恩の念仏を第一義とする念仏寺・阿弥陀寺が下層民衆に浸透したこと、下層民衆による神祇不拜をつうじての呪術批判や呪詛批判が増加し、合理的思想の民衆の基盤が形成されていたことを論じた。³⁾

しかし、中世における技術と呪術との相関関係や両者の結合状態をあきらかにする研究課題は史料学的にも歴史学的にも未開拓の分野であり、研究の深化をはからなければならない。とりわけ、近年では民俗学・人類学での妖怪や怪異の関心が高まり、歴史学の周辺でも怪異学なるものが提起されている。中世社会と近代社会での呪術や怪異観念の解明とともに、呪術批判や合理的思想の形成の両側面に目配りしながら時代的な差異についても厳密な研究が必要だと考える。

本稿は中近世移行期における『鉄炮之大事』とそれとセットで伝来した『南蛮流秘伝一流』の史料を紹介するとともに、中世の技術や医術と

呪術との相関関係をみておこうとしたものである。この『鉄炮之大事』と『南蛮流秘伝一流』は、長野市七二会字守田にある守田神社が所蔵するもので、天正十九年から元和二年にわたる古文書群である。これらの古文書群には全体としての文書名がない。いいかえれば、この段階では、全体を自己認識する概念が未成立であったことを物語る。ただ、これらの文書群の中には共通して繰り返し登場するのは『鉄炮之大事』という用語である。これまでの研究では、後述するごとく、文禄から慶長年間にかけて諸大名と契約関係をもった炮術師がその技術を体系化・相伝化するために『炮術秘伝書』を作成したことが指摘されている。本稿があつかう史料群は、大名と結びつく炮術師による技術伝書か不明であり、修験者という民間技術者によって相伝された技術書である。その歴史的段階差を明確にするため、本稿では、これらの史料群を『鉄炮之大事』と呼ぶことにした。

また『南蛮流秘伝一流』は、これらの『鉄炮之大事』と一括して伝来したもので、史料名が外題に記されており、その内容は、炮術の南蛮流ではなく、矢疵・玉疵を治療する医療技術を示す医書である。後述するごとく、『医書』についての研究史によれば、戦国期に金傷医による医書が出版され、天文十二年鉄炮の伝来とともに南蛮流医書が伝来したことが指摘されている。しかし、本稿が紹介する史料がポルトガル医書といえるのか否か不明であり、今後の研究にまたなければならない。本書は、金傷医者や南蛮流医師による伝書ではなく、修験者系神社に伝来したもので、鉄炮という技術とセットで相伝された民間技術書としての医書である。そのため、これまでの医書とは別系統の史料群と考え、外題のままに『南蛮流秘伝一流』として史料紹介することにした。いいかえれば、中世社会がその最末期に到達した鉄炮と医学について民間に相伝された技術書であり、中近世移行期の技術・医術と宗教・呪術との関係を分析するのに、格好の史料になりうるものと考ええる。

まず、この史料群を所蔵する守田神社の性格についてみよう。この地域の沿革については、『長野市誌』⁽⁴⁾に詳しい。守田神社の社名については、延喜式神名帳に「守田神社」とあることから、江戸時代国学の勃興の中で文化二年に守田神社の社号允許を請けたことにはじまる。別に論社があり、長野市高田の守田廻神社も宝暦六年守田神社の社号を允許され、長野市穂保にも守田神社があり、古代の守田神社がどれに相当するか定説はない。この地域は戸隠・飯縄山麓に位置し、中世に入ると「吾妻鏡」文治二年に「御室御領丸栗荘」としてみえる。文禄二年南室正頼筆とつたえる「臥雲院縁起」に「信州水内郡小川荘春日郷丸栗村」とみえることから、小川荘と丸栗荘とが隣接しあっており、戦国末期には混在して理解されていた。小川荘・丸栗荘は、顕光寺戸隠神社や飯縄神社への参道が通っており、越後上杉領に続いていた。この山道の支配権をめぐる上杉謙信と武田信玄との川中島合戦が展開された。弘治三年四月十三日武田信玄は「小川・柏鉢より鬼無里・鳥屋筋に向かう絵図」(弥富文書)の作成を命じて、上杉方の戸隠・飯縄神社攻略をめざした。永禄六年(一五六三)四月十四日に「飯縄山之麓、去四日より国中之人夫をもつて路次を作らせ」(歴代古案)とあり、越後攻略をすすめた。この地域は、武田・上杉両軍の川中島合戦での境目になった地域であり、戸隠・飯縄・小菅社が相次いで焼失・移転させられた。天正十年武田勝頼滅亡後、上杉景勝の支配下に入り、文禄三年景勝が朝鮮出兵から無事帰国すると、祈禱の賞として戸隠神社が上杉方の援助で再興された。⁽⁵⁾なお、今回の守田神社文書調査によって、天正十九年に「モリタ明神」、慶長十年に「守田山別当」とみえ、この中近世移行期にすでに「守田」の名称が用いられていたことが判明した。したがって、守田神社文書が作成された前後は、この地域一帯が「守田」と呼ばれ、武田・上杉領国の「境目の地」であり、天正十年から慶長三年に上杉景勝が会津に転封されるまでは、この地域は上杉領であったことがわかる。なお、『鉄炮

之大事」に登場する吉田善兵衛盛定なる人物が、大名上杉氏と契約関係にあった炮術師であったか否かは今後の研究課題にしなければならない。『鉄炮之大事』という文書群の存在は『信濃史料』十七卷(信濃史料刊行会一九六二)ですでに指摘されていたが、その内容は未紹介のままであり、二〇〇三年『長野市誌史料編原始・古代・中世』(長野市)で二部紀年銘のものがはじめて翻刻された。しかし、紙面の制約から天正・文禄のもののみで、慶長・元和のものは翻刻しえなかった。『南蛮流秘伝一流』については、その存在も内容もこれまでまったく未紹介であり、新出の史料である。本報告はその全貌をあきらかにすることを目的とする。

①史料翻刻

1 天正文書

1、天正十九年正月、守田明神誓文

〔史料〕 縦二四・五×横三四・五

モリタ明神

天正十九年正ガツ吉日

世ノナカノ人ノ子カイヲテラストテ、ウキヨニノコルミタノ

トモシヒ

月ヤアラヌ春ヤムカシノ春ナラヌ、ワカミ一ハモトノミ

ニシテ

ミヤシロヲ、ヒラキテミレハ、ナニモナシ、ヲカム心ゾ、カミト

ナルラン

シヤクチャウニ、三本アリ

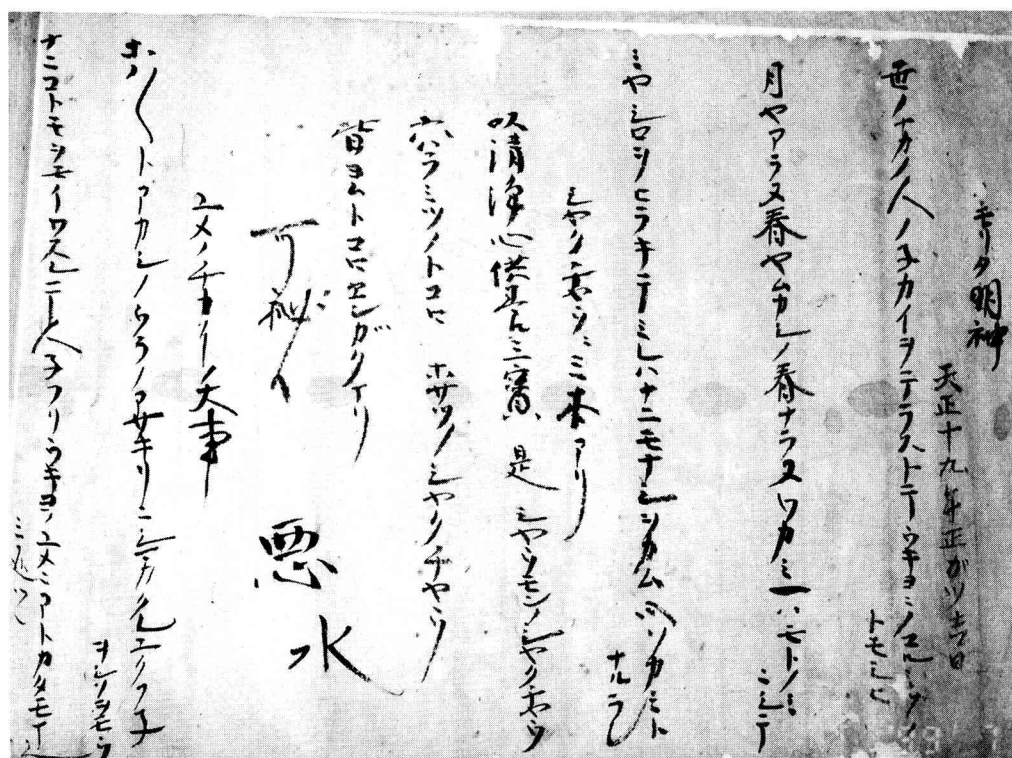


写真1 守田明神誓文（天正十九年正月）

以清浄心供養三寶、是シヤウモンノシヤクチャウ
六ハラミツノトコロ ホサツノシヤクチャウ
皆ヨムトコロエンガクナリ
可秘候 悪水

ユメノチカイノ大事

ホノくト、アカシノウラノアサキリニ、シマカクレユクフ子

ヲシソヲモウ

ナニコトモ、ヲモイワスレテ、人子フリ、ウキヨノユメニ、アトカ
タモナシ 三返ツ、

解説

『信濃史料』十七卷二五三頁に紹介された。端裏書として「呪文」とあるが、現状では裏打紙によって端裏書は確認しえなかった。

守田明神の法楽和歌をカタカナ書したもの。この和歌的呪文が鉄炮の技術的調合法の伝書とセットで伝来していることが、中世的特質の古い形態といえよう。

2、火薬調合次第

〔史料〕 切紙 縦一四・〇×横八〇・五

四二・五（一紙）・三八・〇（二紙）

〔天正文書〕

（前闕）

拾四文目 えん

同式分三朱 遊

三分しゆ中 は

山鳥くすり

九文目 えん

壹分式しゆ 遊

式分 は

あたりくすり

十二文目 ゑん
 壹分壹朱 ゆ
 一分式しゆ は
 惣兵衛くすり
 拾文目 ゑん
 壹分 ゆ
 式文目 は
 口くすり
 七文め ゑん
 壹分しゆ中 ゆ
 壹分式朱 は
 四十五文目 ゑん
 四文三朱 ゆ
 九文六朱 は
 口くすり
 七文目 ゑん
 壹文め ゆ
 式文め は
 口くすり
 六文目 ゑん
 二朱 遊
 三しゆ は
 天正十九年正月廿三日
 大事ひす篇し、くく

解説

火薬の調合の仕方を述べた技術書である。文禄のものと比較する

と、分量が先に書かれ、種類も塩Ⅱゑん、湯Ⅱ遊 灰Ⅱはと書くなどその書法が異なっている。これまで『信濃史料』でも未紹介であり、『長野市誌資料編』（長野市、二〇〇三）ではじめて紹介された。この種の火薬調合次第の最古のものは、上杉家文書 永禄二年（一五五九）六月廿九日「鉄炮薬之方并調合次第」とされているから、天正十九年（一五九二）のものとしては初期の技術書のひとつということになる。

1 文禄文書

1、鉄炮目当の大事

〔史料〕 切紙 縦一四・〇×横九七・二

三五・〇（一紙） 三八・五（二紙） 七・五（三紙）
 一六・二（四紙）

以下、朱筆による丹勘点や勘合筆の書入れが随所にみえるが、煩雑にわたるので省略した。

（端裏書）「文禄文書」

「めあての大事」

鉄炮之大事

- 一 鉄炮之おく（奥）の手の事
- 一 鉄炮たひまつ（松明）の事
- 一 水鉄炮之事
- 一 水火屋（火矢）之事
- 一 よすち（四筋）火なわ之事
- 一 野中の嵐之事
- 一 ちくし玉之事

- 一 たき玉之事
 - 一 くのめ之事
 - 一 三角玉の事
 - 一 ちやうちん(提灯) けし(消し) の事
 - 一 たひまつけしの事
 - 一 柳枝のめあて之事
 - 一 すすめ(雀) うつ玉之事
 - 一 はしやうめあて之事
 - 一 かち物のめあて之事
 - 一 やさま(矢狭間) の大事
 - 一 筒けんの事
 - 一 たにそこ(谷底) のめあて之事
 - 一 せみねをわけてうつへし
 - 一 つるのめあて之事
 - 一 も、のつけねをうつへし
 - 一 がんのめあて之事
 - 一 のはをうつへし
 - 一 木鳥のめあて ふと身お、
うつへし
 - 一 さは下のめあて 三の
羽をうつへし
 - 一 ゆうしはつしのめあて之事
 - 一 水鳥のめあて之事
 - 一 前きる(切) 筒之大事
 - 一 うしろきる筒之事
- 尚々口伝有

吉田善兵衛盛定(花押)

干時文禄三甲午二月吉日

屋嶋藤三郎殿渡

解説

文禄三年二月、吉田盛定が「鉄炮之大事」を屋嶋藤三郎に与えたことがわかる。この文書群を所蔵してきたのが守田神社の宮司矢嶋家であり、矢嶋家から守田神社に寄贈され、現在では神社が所有している。矢嶋家は現在も神社門前に存続している。この屋嶋藤三郎は史料上にみえる「守田山別当」であり、修験者であったとみてまちがいない。旧宮司矢嶋家が、屋嶋藤三郎の子孫にあたることまちがいない。

『信濃史料』一七卷五五一頁に巻頭と巻奥のみ紹介。「鉄炮位名之事、鉄炮奥之事、萬々口伝有、王うせい、鉄炮打様々大事、鉄炮之大事二、同文奥書アリ、コレヲ略ス」とある。

これら文書群の全体をなんと呼ぶか名づけられていない。「文禄文書」という書入れは後代の筆であり、この時期、鉄炮や火薬の技術書全体を対峙化し、客観視する段階に至っていなかったことがわかる。本稿では、これら文書群を『鉄炮之大事』と呼ぶことにする。なお個別の巻の九巻がどのような構成・順序になっていたかは、伝来状態からは不明である。宇田川武久の教示によれば、内容検討から一定の順序性を復元できる可能性があるという。今後の課題である。

ここでは、火薬の種類に応じた調合法とともに鉄炮を撃つ対象物として鳥類の的をどこにするか具体的な技術の伝授になっている。殺人兵器と理解されている鉄炮が、この時期鳥類という動くしかも小さいものを的にして射る技術・射撃術として伝授されていることは注目すべきである。南蛮や東南アジアの鉄炮が当初から狩猟技術と殺人兵器の二面性をもって流布していた可能性が高い。

2、四方固めの大事

切紙 一四・〇×横八八・二

二七・五(一紙) 三八・二(二紙) 八・二(三紙)

一四・五(四紙)

(端裏書)「文禄文書」

「四方かための大事」

目当は(場)にて四方かための大事

一、目当ニ而テごしんほう(御神寶) 其後

五大そののいん(印)にて、しゆ(主) いわく

東方かうさんせやしや(降三世夜叉) 明王、南方

くたりやしや(軍荼利夜叉) 明王 西方大いとか

やしや(大威徳夜叉) 明王、ほつ(北) 方こんかう

やしや(金剛夜叉) 明王ちうわう(中央) 大日

大しやう(将) ふとう(不動) 明王 則われと

くわんねん(観念) すへし

かつしやうのいんにて

一、天長地久ご生んあん満

そくさい(息災) あんせん(安全) 天下太

平国土あんせん(安全) 之也

一、むらふしのいんにて、しゆ二いわく

ちはやふる、我心より

なすわさ(技)をいつれの

カミ(神)か、よそ二、見るへし

きうく(急々)によ(如) 里つ

りやう(律令) 須臾を待たず

一、ふけんミまのいんにて

こうしんうしやう、すい

はうやしやう、こしゆく人

天、としせうふつくわ(仏果)

一、其後、九し(籤)をおこなふへし

りんひやうとうしやかい

ぢん、れつさひせん

七なん(難)そくめつ(即滅) 七ふく(福)

そくしやう(即生)

如此四方かためをおこなふ

ならば、きよなん(巨難) 有間敷候

たとへ我ときむ物なつてはつ

しなとすると、くるし

からす、此いんしゆ(印種)をもつて我か

身をかり、目当場へ出へ

し、少も大事有間敷候

条々口伝有

吉田善兵衛盛定(花押)

干時文禄三甲午二月吉日

屋嶋藤三郎殿渡

解説

鉄炮の技術を密教の五大尊信仰によって正当化し、朝廷や鎌倉幕府の箇固め・四角四境祭に伝統をもつ四方固めとセットで技術伝承がはかられたことがわかる。中世の技術や科学が密教的信仰や呪術とセットで伝授・習得されるように変化したことがわかる。

3、鉄炮打様の大事

切紙 横一四・〇×横一一七・五

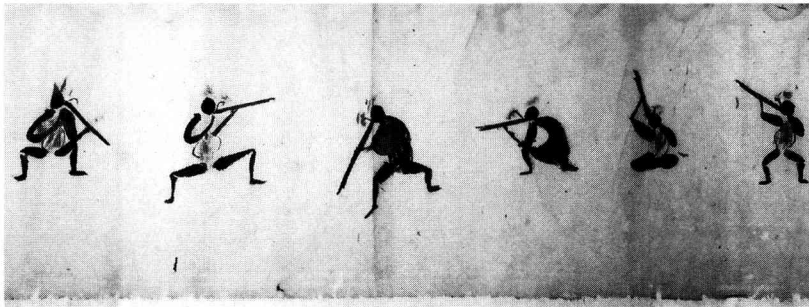


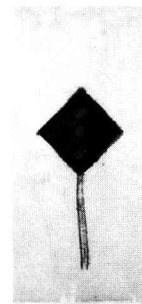
写真 2 文禄文書 鉄炮打様の大事

三六・八（一紙） 三七・〇（二紙） 三一・七（三紙）
一二・〇（四紙）

鉄炮打様の大事

しゆしん（執心）の人ハ、心へ
かたし、仍如此ゑづ（絵図）ニ
うつし置者也

いんや（陰陽）の目当如此



一、右如此かきしゆるすとハ
いへえとも条々多くの
口伝可有し

一、鉄炮目当ばへもつて

出事鉄炮を右の手ニ

もち火縄を左の手ニ

もちテ出へし、是則

鉄炮ハ不とう明王の

ちへの里けん也、火縄ハ

はくの縄をひう（表）する也

是二仍鬼神あくま（悪魔）も

をそれ（恐）をなし候者也

ぶしやう（無精）にて鉄砲を取

へからす条々口伝有

吉田善兵衛盛定（花押）

干時文禄三甲午二月吉日

屋嶋藤三郎殿渡

解説

鉄炮の技法を図解しており、その技術を不動明王の智慧の俚言と説く。鉄炮が鬼神悪魔を恐れさすものとされ密教によって鉄炮による殺生の正当化がなされている。中世における武術による殺生を中世仏教がどのように正当化していたかは日本仏教史の未解明な大問題である。

4、鉄炮の大事

切紙 縦一四・〇×縦一四四・〇

三八・〇（一紙） 三九・五（二紙）

四七・五（三紙） 一九・〇（四紙）

（端裏書）「文禄文書」

「鉄炮立はし」「大事」

鉄炮之大事

すてに此鉄炮といつは、天

地和合のさてんなり、又ハ

こんたひ里やうふ（金胎両部）のニツ也

天の廿八しゆく（宿）、地の三十六

き（禽）、是をひやう（表）する物なり

又夫母のかたち日月をも

かた取る物なり、彼鉄炮と

いつは、天ちく（竺）わしの宮

のたけ（嶽）にしやくそん（釈尊）御

せんほう（説法）なされ候所に大

ばという物、備をなし申

さんとする時、あくら

せん人（仙人）乃大ばをなんち（汝）

いかなれば、御せんほうに

備をなす事口惜次第

なりとて、あなん（阿難）かしう（迦葉）

ともんとう（問答）有て、すてに

大ばを、百おく（億）まん（万）こう（劫）お

ふるとも、あひ（阿鼻）無間地獄に

たさいすへきとて、いか

（怒）られたま（給）ひし時、大たう（大唐）

に、たひしんけんちうの

里というところあり、その

所にいかにも、ちへ（智慧）たけ又ハ

くふう（工夫）きてん（機転）四百余間に

かくれなき物に、無意思と

いふ物、かの鉄炮をくふう

しいたし、すてにそ乃

以後、しやくそん（釈尊）の御せん

ほう（説法）被成候処又備をな

し候物、かのてつほうにて

しつ（鎮）めたまひ（給）けり、当代の

物にてあらず、しやくそん

の御時よりはしまる也

中懇（忠懇）あまりに三千大千

せかい（世界）乃あく（悪）といふあく（悪）おなす

物、しつ（鎮）まりければ、又せ

かい（世界）におゐてまつせ（末世）のよ（世）と

なり、子かをや（親）をころ（殺）し

おや（親）か子をころし、こと／＼く
しつ（鎮）まらざるゆへ（故）に又
彼鉄炮をたいたう（大唐）より

あらためいま日本大千

せかい（世界）のゆミ（弓）や（矢）ををさ（納）むる也

さるほとに、此鉄炮にあまた

の口伝有、されはかの

てつほう（鉄炮）にあたる物ハ人

けん（人間）によらす、鳥るい（類）ち

くるい（畜類）までもみな（皆）こと／＼く

ふつくわ（仏果）にいたり、そく

しん（即身）そくふつ（即仏）うたかい有

間敷候あまたの大事

又々口伝有仍如件

吉田善兵衛盛定（花押）

干時文禄三甲午二月吉日

屋嶋藤三郎殿渡

解説

鉄炮を釈尊の説法以来のものとし、百億万劫の無間地獄におくるように命じられたが大唐に移し、そこで無意思というものが鉄炮を工夫した。末世になり親子が殺しあう世界を鎮めるのが鉄炮の役割で大唐より日本での弓矢を納めるために伝来した。鉄炮に当たった人間・鳥類・畜類は皆仏果により即身即仏すると説く。鉄炮による殺害の正当化の論理が仏教の教理によって説かれる。のちの9、鉄砲奥の大事と類似する。鉄砲の導入が弓矢を納める＝平和実現のための手段とする認識が展開されていることは、兵器と戦争・平和の

緊張関係が中世人にとっても理解されていたことを示すものであろう。近代においても原爆が戦争を終結するための手段と正当化するアメリカの論理と類似しており、興味深い。

5、鉄炮位名の大事

切紙 縦一四・〇×横四七・〇 三六・八（二紙）

一〇・二（二紙）

（端裏書）「文禄文書」

「鉄炮位名之事」

爰に鉄炮の位名と云ハ天

地かいひやく（開闢）の御時、はしめ

おきし事、当代にあら

す、たいたう（大唐）よりつくし（筑紫）

ふんご（豊後）の国にそこうと

いふむら（村）あり、そのむら

にて鉄炮をひろめし

時、彼きしのわた（岸和田）といふ

人さつま（薩摩）の国の人にて

候か、其時あき人（商人）になり

しか（鹿）はな（放）すやう（様）をつたへ

様子を、たんれん（鍛錬）したる故二

一流口伝するにつゐて

きしのわだ流と者申

なり能々可口伝有候仍

如件

吉田善兵衛盛定（花押）

干時文禄三甲午二月吉日

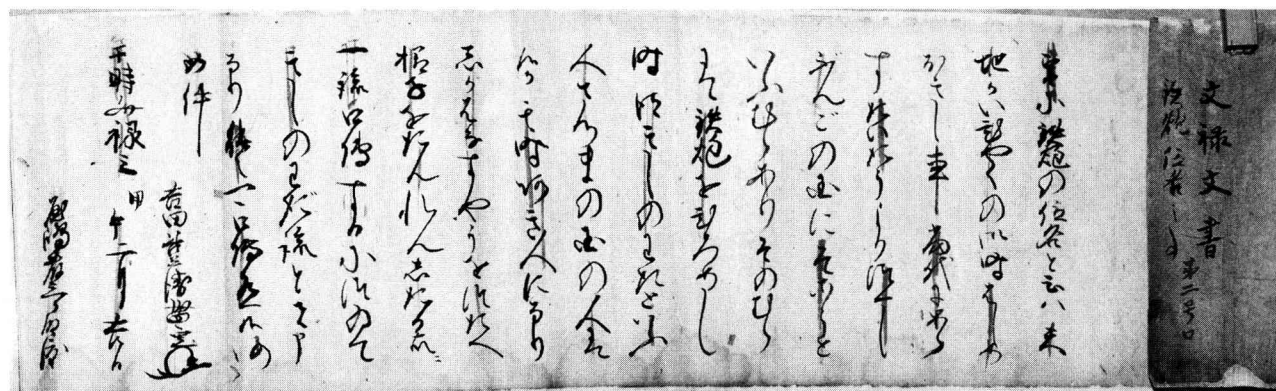


写真3 文禄文書 鉄炮位名の大事

屋嶋藤三郎殿渡

(写真3)

解説

この吉田盛定による鉄炮之大事は大唐から豊後国に伝来し薩摩国人の商人が立てた岸和田流と呼ばれた流派の下で成立したことを伝える。炮術秘伝書は稲富流・田付流のものが第一期のものとして知られる。岸和田流の炮術秘伝書は未発見であるが、稲富流・田付流に先行する炮術の流派と指摘されている。守田神社所蔵の『鉄炮之大事』が岸和田流と密接な関係にあったことがわかるとともに、もつとも初期の技術書であることを示している。

商人が鉄炮を伝えたという伝承は、上杉謙信への將軍義輝からの伝授が粉井という御蔵で商人的国人によってなされたことと類似しており、興味深い。

6、鉄炮九の大事(数え歌)

切紙 縦一四・〇×横一六八・一

三二・〇(一紙) 三七・三(二紙) 三八・〇(三紙)
三八・八(四紙) 一二・五(五紙) 一〇・五(六紙)

(端裏書)「文禄文書」

「鉄炮に九ツノ大事」

鉄炮之大事

一、九の大事

たまのこくい(極意)之事

筒二あひたま之事

二、引かねのこくい之事

つよくてかなふへからす

又よくてなりかたし

三、目の内乃こくい之事

遠め近め能々見へし

四、いき(息)のこくい之事

つきてかなふへからす

又つかてなりかたし

五、だい(台)のこくい之事

右にてハかなわし

左さたん(左袒)て(手)さたまらす

六、かん(寒)夜に霜をきく事

七、口薬のこくい(極意)之事

しめりてかなふ(叶)へからす候

こくい(極意)のうちのめあての事

八、中はなし之事

右のひち(肘)をそう身にを

しあて(押当)候左ゑあし(足)をひらき

て一めはなすへし

一、いろはうた之事

中はなし、くも(雲)よりほし(星)を見

おとして

まなこの光ほしとうつへし

鉄炮の手前能とうをかためて

うつ人を

そしる人こそはか(墓)の内なり

ミナ人のめあてのあるをしらす

して

しとろもどろにはなす

てつほう

二色ハ、いろわけならべなら篇つつ

かけん一ツの大事なりけり

三色に、ハた、つよかれとねか(願)わくハ

筒と薬にしく物ハなし

四色に、ハしなくたんれんする人も

なりふしよくは、物うかりけり

五くひ(極意)とハ、こくいの内をめあてあり

めあてのうちに心もちあり

六つか(難)しや、きれし鉄炮はなす人

心の内のへたとなるへし

七ふしき、むねに薬をおきながら

よかて(良手)をたつぬる人そはかなし

八そを、一ツにしめてはなさすわ

あたらん事ハふちやうなりけり

九

口薬をそくたちぬることならは

あたらぬ物とかねてしるへし

とふ(飛)物を、とくたうなくてはな(手放)す人

心の内乃物うかりけり

山川のさきになく、とち

から(土地柄)も

身をすててこそ、う(浮)かふせ(瀬)も

あれ

うくいすの、すこもり、したる処おは

はつね(初音)を、き、(聞)て、物うかりけり

わし(鷲)たか(鷹)の、とだちの山に、わけ入て

のかへりするを、見つけさりけり

引かねを、引と心に、し(知)らすなよ

暮のさめたる、ここち(心地)たるへし

かけあいに、む中はなしを、知すして

むすひ打乃木、むやく(無役)なりけり

かけあひハ、しほひに、見ゆるかに(蟹)

のあし(足)

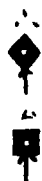
よこ(横)によ(寄)るこそ、道の道多り

かけあいに、内の心を、しらすして

さたむとおもふ、あらそいなしそ

さんかくハ、ミねの松風吹はらい

しん如の月をあきらかに見よ



つれはなし、右左をうつとかも

地形によりて三寸さるへし

みな人は、我もくとすすめとも

つちのあたまハよもや

はつさし

尚々口伝有

吉田善兵衛盛定(花押)

干時文禄三甲午二月吉日

屋嶋藤三郎殿渡

解説

鉄炮の技術をわかりやすくいろは歌・数え歌にして伝授する。息次ぎ、口業、構え姿勢など技法の伝授がわかりやすく記述されている。

7、火薬調合次第

切紙 縦一四・〇×横一六六・一

三一・七(一紙) 四〇・〇(二紙) 四〇・〇(三紙)

五四・四(四紙)

(前闕)

里うせい

塩 六文め

湯 一しゆ

灰 壺分二首

鼠火

塩 二分二首

湯 一しゆ

灰 三しや

ききやう火

ゑん 貳分

湯 三しゆ

灰 一分

風車

塩 二分

鉄 二しゆ

ゆ 二しゆ

はい 一分
花車
えん 二分
ゆ 三しゆ
はい 一しゆ
てつ 二しゆ
ほたん
えん 三分
ゆ 一分
はい 二分六首
てつ 三しゆ
きんせい花
えん 二分
ゆ しゆ中
てつ 一しゆ
灰 壺しゆ
いとさくら
水車
えん 三分
はい 二分
ゆ 一分
一ちやうきく
えん 一両
ゆ 一分
はい 三しゆ
てつ 二分
一夜せん

塩 二分
湯 一分
灰 三しゆ
てつ 二しゆ
たち草
えん 二分
ゆ 三しゆ
灰 壺しゆ
てつ 三しゆ
右定之口伝有
えん 壺両
ゆ 壺首
てつ 二分
灰 二分
やまふき
えん 三分
ゆ 二しゆ
はい 三しゆ
てつ 壺しゆ
送車
えん 一両
ゆ 一しゆ
はい 二しゆ
てつ 一分
なわひ
えん 一両
ゆ 二しゆ

8

灰 二分

(朱筆)

「我か手吉 人見よとてハ

かきおかす

なかくくあとの

かたミとも

なれ」

吉田善兵衛盛定(花押)

千時文禄三甲午二月吉日

屋嶋藤三郎殿渡

解説

火薬の調合の種類を記すなかで、塩硝・硫黄・灰以外にも鉄などの成分を混ぜる火薬調合が行われていたことがわかる。自分の技術を誇るためではなく、形見として記載したことを朱筆している。技術伝授の出発点として注目される。

火薬調合次第(前闕)

切紙 縦一四・〇×横三五六・五

一三・〇(一紙) 四〇・〇(二紙) 四〇・五(三紙)

三九・八(四紙) 四〇・〇(五紙) 四〇・五(六紙)

四〇・二(七紙) 四〇・二(八紙) 三九・三(九紙)

二四・〇(十紙)

(前闕)

塩 八文目

灰 三文目

硫 二文目

同薬

塩 一文目

灰 一首

硫 首半

同薬

塩 六文目

灰 二文目

湯 一文目

同薬

塩 七文目

灰 貳文め

湯 一文目

同薬

塩 八文目

灰 四文目

硫 三文目

口薬上中

塩松 六文め

灰 一文三首

硫 一文目

同上

塩 四文目

灰 一文目つよく

硫 三首

五両薬

塩 四十文目

灰 十文目
 硫 十文目
 塩 六十文目
 灰 十一文目
 湯 十文目
 塩 七両薬
 灰 七両
 湯 二両
 塩 七両半薬
 塩 七十五文目
 灰 十五文め
 湯 七文め
 塩 八両薬
 塩 八両二分
 灰 二両三分
 湯 一両二分
 九両薬
 塩 九両
 灰 五両三分
 湯 四両
 拾両薬
 塩 百文目
 灰 廿目
 湯 十貳文目
 拾一両薬

塩 廿八文目
 灰 九文目
 湯 八文目
 拾二両薬
 塩 十二両目
 灰 六両二分
 硫黄 四両貳分
 仁首(朱)薬
 塩 三文目
 灰 二文目
 硫 三首
 三首(朱)薬
 塩 拾文目
 灰 貳文目
 硫 一文目
 鳥打薬
 塩 十文一首
 灰 貳文一しゆ
 硫 一文二しゆ
 口薬上
 塩 廿四文目
 灰 六文目
 湯 三文目
 同薬
 塩 十二文目
 灰 四文目
 硫 貳文目

灰六文め

二文め

十湯

勿 灰

己上口伝

山ハ三ツ 口ハ九ツ

是そこの

鬼のすミかは

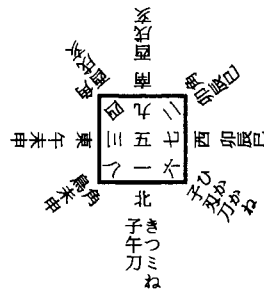
いわや(岩屋)なりけり

残留鬼

うら

本

堂 五しんほう



萬二口伝有

吉田善兵衛盛定(花押)

干時文禄三甲午二月吉日

屋嶋藤三郎殿渡

解説

火薬の種類が、塩・灰・湯の三種類の配合率の変化によって多彩になっている。「塩」が「塩松」||塩硝||硝石、「灰」が桐やタラの木、ひささき||ヒサカキ||アケビの異称、柳など木灰を配合したものの、「湯」||「硫」||「湯黄」||「硫黄」であることがわかる。鉄がまっ

たく加えられないのが特徴となっている。

十二両薬、二朱薬、三朱薬、口薬、八寸薬など数字を名前にした火薬名や、雷薬など音を連想させるもの。稲葉薬・岸和田薬などの鉄炮術の流派からでた名前が火薬名となっていた。軽嶋薬については不明である。火薬調合法という技術が流派として相伝承されたのは、中世寺院における法会次第や聖教類・法流の相伝とまったく同様である。

9、鉄炮奥の大事

切紙 縦一四・〇×横二八・八・三

三三・〇(二紙) 三七・五(二紙) 三七・七(三紙)
三八・〇(四紙) 三七・八(五紙) 三八・一(六紙)
三八・〇(七紙) 一五・二(八紙) 八・〇(九紙)

(端裏書)「文禄文書」

「鉄炮をく」「」

鉄炮奥之大事之巻物

かん(漢)乃かうそ(高祖)のしんか(臣下)

に神主道草と云人在

しやくそん(釈尊)御せつほう(説法)

の時天ちく(天然)、ちふら山

ゑ参つくくと、御せつ

ほうをちやう聞(聴聞)申て

しんくついきのなみた(涙)、

おなか(流)しありかたき(有難)事

何にたとゑんかた(例え方)もなし

されば、こ、に人間ハわつ

か（僅か）、六十二年を定命と

相定、せかい（世界）に、をほく（多く）のよ

わい（齢）をたもつことと云云

御せつほう（説法）の時、大は

備をなし申所お無意思

くふう（工夫）のてつほう（鉄炮）を、もつ

て、そま（杣）を払しつ（鎮）めける

ゆへに、彼御せつほう已二

ちやうしゅ被成候、然ハ、

しやくそん（釈尊）ハ、しゅちやう（衆生）

けど（穢土）のために、一切きやう（経）

をことごとく、とき給ひけり

此儀よろしきかなや

仏法のちまた（巷）にむま

れ（生まれ）きて後生のことほり（理）

を、しらずんば、人間の

かないし、とて、その時

しやくそん（釈尊）の御前へ参

此御ことわりを、なけき（嘆）かな

しみ（悲）申候へハ、しやくそん

さてハ、諸きやう（経）おおしといへ

とも、なんち（汝）そくしん（即身）

そく仏（即仏）の義お、あた（与）ゑん

とて、此きやうをふそく（付属）し

たまふ也

南無ふかうほうさつもこ

さ、御しりんきんさ、くしゅん

ふひちききんさ、御きやう（経）

しゅんきやう（経）きしゅんき

ほろういりいうじりい

しうゑんかり、御しんもこ

ほうちや、ほろみつと

此きやうを、あたえ（与）へ給ゑば

無意思此きやう（経）をうけ

取奉、毎日とくしゅ（読誦）したま

い（給）ければ、そのくりき（功力）二

よりて、已にあひ（阿鼻）無間地

ごく之くるし（苦）をのかれ（逃）とそ

つのないいん（兜率内院）にちやうふつ（成仏）

うたかい（疑）なし、さるほとに鉄

炮をてにとり、しやう（生）有

物をうつ（撃つ）ときわ、此きやう（経）

およむ（読）篇し、何物をうち

候ても、此きやう（経）のくりきに

よつて、ちやうふつ（成仏）うたかい（疑）

あるへからず、爰に一ツ

ぢ、いきとて、こん（金）たひ（胎）りやう

ふ（両部）の、二ツハいて（出）いる（入）いき（息）も

こんたひりやうふ、りやういん（両院）

二つも、こんたいりう日月

をも、かた（型）とれる也、りやうの

ちも、こんたひりやうふ（金胎両部）也

又左右のても、こんたいり

やうふ（金胎両部）なり

左ハこれ、こんかうかい（金剛界）

右ハこれ、たひさうかい（胎藏界）

こんたひりやうふ（金胎両部）是なり

一、ひはさみかね（火挾金）ハ天、ひさら（火皿）ハ

地、これあうん（阿阺）をひやう（表）し

又是こんたひりやうふ（金胎両部）の

二ツなり、かるか（狩鹿）とハ、天、ねし（螺旋）

かね（金）ハ、地なり、これもこんた

いりやうふ（金胎両部）なり、はし（走）る玉ハ

天、あたる物ハ、地なり、こん

かうかい（金剛界）たいざうかひ（胎藏界）こん

たひりやうふ二ツ是なり

爰にたとへは、一トとせ

りうくうせかい（龍宮世界）にしゆみ

やうてん（天）とゆう処有

そのちやうどの（庁殿）もん（門）の

はしら（柱）に、こんたいりや

うふ（金胎両部）をまなひ（学）給ひし也

さあハんときハ、せかい（世界）の黒

かねお、しとへ共、こんかうか

い（金剛界）たいさうかい（胎藏界）のかね（金）にて彼

鉄炮を作たてへしとて

りう神たちを、たのみ、ほつ

なんだりうわう（竜王）、じやかつ

らりうわう（竜王）、わしゆき

りうわう、あなははつたりう

わう（竜王）まなし龍王五人の

りうわうたちをたのみ

かのもん柱を、ぬすみとりて

鉄炮をつくりたて給ひ

けり、彼鉄炮をつくくくと

かんたん（感嘆）いたすに、ゑん

ふたこんのかね（金）も、より合候

について、此儀をかたとり

たまひ（給）てまさうふほくの

せひれいとう（精霊塔）とて、ことくく

のしゆちやうさいと被成けり

一切諸きやう（経）諸聞仏ミタ

如来、ふもんほん法花き

やう（経）ハ、一部八卷廿八品

さいしうわうきやう（最勝王経）十卷

五部の大乗きやう三十卷

金剛きやう六卷ことく

く諸きやうを彼無意思

にあたへ給ひけり、是に従よつて

て、さうてん（相伝）のやかう（屋号）と云

なり、今けんせ（現世）において

まつせ（末世）のけと（穢土）ちうほう（重寶）

とあかめ候事、只人作

にあらず、ことくくほとけ（仏）

のしるし給ひけり

かたしけなく（忝）も此巻物

をふさた（無沙汰）の、ともから（輩）ハ、五

体ハ、すくミ物いふ事も

かなわす、只ならずと

うん／＼

各々口伝有

吉田善兵衛盛定(花押)

于時文禄三年甲午二月吉日

屋嶋藤三郎殿渡

解説

鉄炮の由来を、漢の高祖と釈迦の説法と結びつけて説明する。鉄炮が無意思の工夫によつて製造されたものであり、釈迦の諸経典が無意思物である鉄炮の中に含まれていること、鉄炮を手にとつて生類を撃つときは、この経典を読むべきであること、「ひはさみのかね」と「ひさら」、「かるか」と「ねじかね(ヌキ)」、「はしる玉」と「あたる物」など鉄炮の部品を金剛界・胎藏界の両部曼荼羅によつて説明し、龍王が門柱を盗み出して鉄炮を製造したもので、人の作ではなく仏の印であることなどを主張する。鉄炮の由来とそれによる殺生を経典読誦によつて正当化する論理を説いている。鉄炮という技術が無意思物としており、人間・動物とはことなつて意思のないものという合理的認識論が注目される。

天正年間の伝書と、文禄の伝書ではその説明の論理が大きく変化していることがわかる。

10

人形祭文

切紙 縦一四・〇×横六一・五

四五・〇(一紙) 一六・五(二紙)

ソモ／＼此人形ト者ハ天竺ニテワ

日照之男月照ノ女ト

アラワレテ・女人之心ニ入カワリ

タイ・タウニテワ・ヒギヤウノ男

ヒギヤウノ・女ト・ユウ・ワレ我朝

ニテワ人形ト・ナツテ・リウジユ

菩薩ノツタエテ。イワク

五コン六通ヲ具足シテ

日ルワ三千里ヲ遊行シ

ヨルワ八万里ノ界ヲ。コエ

木ニ入テモ。タヲマス火ニ入テモ

ヤケツ土ニ入テモ。ウツモレツ

金ニ入テモ。キレツ。水ニ入テモ

ヲモレツ・タンコン。ビレイ(美麗)ニシテ

タンジヤウノサウアリ。福得ヲ

ザウジヤウシテ。ベイサイ

キワマリナシ。身ヲ金色ニ

シテ心正直ナリ。カリノ

ゴトクノ沙門人形ワ

衣不浄ノ身ニカワリ

カクノ。ゴトク南ラン神モ

ウケヨロコビ。イカナラン

鬼神カ。ジョサイ(除災)。セザランヤ

トク／＼ウケ納受ヲ

タレ玉ヘヤタラタ 奏賀

吟急急如律令

于時文禄五年丙申五月吉日 敬白

解説

文禄三年の吉田盛定による一群の伝書とは区別される。文禄五年の銘を持った祭文である。

鉄炮の大事とともに人形が信仰され、その由緒を記したものの。天竺・大唐・我朝の三国伝来で龍樹菩薩、陰陽道などが混在した信仰形態をとっている。吉田盛定のものとはあきらかに異筆であり、稚拙な筆による。

3 近世文書

1、不動明王祭文

縦紙 縦二七・五×横五五・六（二紙四一・〇 二紙一四・六）

フトウノサイモン

ソモく（梵字）大シヤウフトウ明王ト申ハ、大日カク王如来ノ、キヤウザウ、ヒルシヤナ佛ノスイシヤク（垂迹）シバラク（暫く）ヂヤツクワウ

シヤウドノミヤマ（御山）ヲ、サツテ、カリニ明王トブندگانドウクノ

チリ（塵）ニマチワ（交わ）リタマウ、アクマ（悪魔）ガウフクノカタチ（形）ヲゲン（現）シタ

マウ、ソノイロハ、サウロクニシテ、ボウクノサウ（相）ニニタ（似）リ、上下ノ

キバ（牙）ヲクイチカイ（食違い）、左ノミテニハ、ゲタウヲカラメ（絡め）ンカタ

メニサンサウ半ノ、バクチワヲモチタマウ、右ノソテニワアレ□ガ□□ク、リケンヲモツテ、ナンゲノカヂンヲ、サイ

トス、左ノ御目テハ、シヤウクン、ホダイ（菩提）ヲ、ミスカシ、右ノ御目テハ

ホケシユ生（衆生）ヲミトリシ、御（オン）カウヘ（頭）ニハ、ハユウノレンゲヲ、イタタキ

ケンブツジヤウタウヲ、アラワシ——金ゴウ（金剛）ノバンジヤリニヲワシマシテハ、八タイ（八大）ムケン（無間）ノホノヲ々（炎）シメ（示）シ火シヤウ

サンマイニ、□ユシテハ、四界マリヨク（魔力）ノシユラ（修羅）

ノトウミヤウ（灯明）

ヲ、ヤキウシナ井タマウ、マコトニ、クワシヤウ（果照）サンマイ

（三昧）ナレハ、是□

イエリ、前ニハレイゲン（霊現）ノタキヲ、ヲトシ、フソウフゲン（普賢）

ノミツトシテ、月ミヲ、ウツシ、サウカイバンリ（万里）ノホカニ、フミヤウヲ、ナカ

シ（流し）、ウシナイタマウ（失い給う）、有時ハコンガラ、セイタカ三十六ドウ

ジ（童子）インフツ（印仏）シテ、上下ノザヲ、サラ（去）ス、フクマガウフリ

日月トマナリトシ、コクウ（虚空）ノクモ（雲）ヲハ、イキ（息）トフキ（吹）三トリ

無明ノマケイ（魔界）シユラ王ノ、リントウヲ、キリケンカシンヂヤンノ、アキノ月ワ、三トリ、ホンナウ（煩惱）ノヤミヲ、テラス

タトエハ、タイく、ヲフル（負）ジヤケシサキナリトモ、カタジケ

ナクモ、（梵字）大シヤウフトウ明王ノチエ（智慧）ノリケン（利剣）ヲ、

フリタマエハ、コンカラ、ハビヤリ、レンゲヲ、サ、ゲテ

ジュシカラ、チャウラン

フラウフシ(不老不死)ノ、クスリヲ、ソタキタマウ、セイタカハ
コンゴウ(金剛)ノ、ツエ(杖)ヲ、ヒツサゲテ、ヂユサイ、セラ
ン、トチカツ(誓)テ

マクラ(枕)ノ上ニ、立タマウ、イカタイワンヤ、クセン八カイヲ、
五タイト

シ、日月トマナクトシ、コクウ(虚空)ノ、クモ(雲)ヲ、イキト、
フキ、サントリ

ムミヤウ(無明)ノ、マケイ(魔界)シユラ王ナリトモ、イカテカ、
コタニトド

マランヤ、アラギ子、カワリ(代)ハ、センシユ(千手)ノシンゾ
ウニ、立入

シユグエン(宿縁)、マレニ、シユゴ(守護)セシメタマエ、アヒ
ラランケン

トウ一チコニウアジウンタラタカンマン
慶長十乙己二月十九日 モリタ山別当

解説

『信濃史料』『長野市誌』未採録。慶長十年二月十九日守田山別当
が定めた「不動ノ祭文」である。不動明王の形相や利益をのべて賛
歌したもので、守田神社の「モリタ別当」が、不動明王祭文を作成
していたことがわかる。神社が修験道と不動明王信仰とを混在させ
ていたことがわかる。

2、鳥目當の注文

(前闕)

一 かん の 目當之 事

よことりハあか□しを□

一 むふとりハむねを□

うつ篇し

一 を為とりハをさきを見て打□

一 あせ越のとりなしはすこし

あけてうつ也

一 かも成とも又かなりとも□

とりなしは水半分ニ見て五人

前を見てうつ也、野とり成□

四とり成とも

一 わしとりハわたかさかいを見打□

篇し、是ハ水とりのことく

うつ也

一 つるかりの目當、もものつけねを

見てうつ篇し、又木とり□

きとりの間ヲ見て打へし

一 草とりの目當よの物よりも

すさけて打也

一 草し丸物の目當をは、丸物ヲ

うしろの方へきれへし心へし

又志しあるいハななき物をはまへ

の下と心え打也

はたけくすり

一 塩 甘め

一 灰 三匁二しゆ

一 ゆ 貳匁二しゆ

くちくすり

一ゑん八匁一はいゑん三しゆゆゑん

よこ嶋彦兵衛

于時元和元年乙卯正月十六日 吉次（黒印）

屋嶋勝右衛門尉殿御報

解説

元和元年正月六日横嶋彦兵衛吉次が屋嶋勝右衛門殿に伝書一卷を相伝したものである。元和元年になって、これまでの吉田盛定とは別に、横嶋彦兵衛吉次から屋嶋氏に新しい作法書が相伝された。吉田氏と横嶋氏との関係は不明である。屋嶋勝右衛門尉は屋嶋藤三郎の相続人・長子とみてまちがひなからう。この鉄炮大事は、「鷹」「棕鳥」「鴨」「鷺」「鷹」「鶴」など鳥の狩猟のための目当てを伝授するものになっている。鉄砲が、元和年間には狩猟銃として精巧な道具として用いられ、その技術が発達していたことがわかる。しかも、それが文禄年間の鉄炮大事とは異なる相伝者から伝授されていたことは、兵器としての鉄砲と、狩猟具としての鉄砲とが混在しながら、次第に分離しはじめ、「鳥目當」の狩猟技術が独自の文書によって伝授されはじめたのかもしれない。近世社会で狩猟具として鉄砲が普及していたことは、塚本学『生類をめぐる政治』（平凡社選書一九八三）が注目しており、元和年間の文書からも、技術的に裏付けられるものといえよう。

4 年未詳 南蛮流秘伝一流

冊子本 綴葉装 縦一九・〇×横二四・〇 一九丁
読点は「」として翻刻した。

（表紙）



写真4 南蛮流秘伝一流

南蠻流秘伝一流

(一紙)

今蜜や一流

△小ヌキ薬

一メウハン焼 一、ヒサウ石 一、小ベンノタマリ

右二色コ(粉)ニシテ、コフノ上ニ、チャハン、ハリヲ

一日、ハカリ、タテ、其上、アセイテノ油アブラニ

テ、ネリ、付ル、ナリ、二三日、ホトカサニ、

ナル、マテ、ヲクベシ、此薬、サンヒヤウ、ニモ

ヨシ、男女トモニ用也、リヤウジ(療治) 同前

△大ヌキ薬

一ヒサウ石 一カマキリ虫 一ハ井(灰)

一シンシヤ 半分ハ水火シテ 右ノ薬合イカニモアツ(熱)キユ(湯)

一ヂ(地)グモノ腸ニ、ヲシ、マセ(押交) 付ルナリ

(裏)

一、ウワウ一両 一ヒサウ石三分 一シヤクロク、一分

一、百一ホレイ 右、細米メ、ツル、ハコベ、スイ物草、トウブ

ン(等分)ニテ、付ルナリ

△小ヌキニテ、ツクロウ、事

一、ガンガサ 一コセカサ 一アセタマリ

一、クロナマズ 一タムシ 一カシラ、ハケ

一、シラクモ 一サメハダ 一キメ、アシキニ

一、ハス イツサ井、カシラ、ニ 出ル、アサ

右、ノタク井(類)ニ、小ヌキニテ、付ル也、但、少

ツツ、ツケテ、ヨシ

△八段、之、井エ(癒)、薬ノ事

一、段シンシヤ(辰砂)一口ガン石

一ニシ

(写真4)

(二紙)

二、段 タンシヤ 一シヤクロク 一カツブンクス、事

タイシヤ石 一アセンヤク 一ヲシロイ(白粉)

三、段 タイシヤ石 一タンシヤ 一経粉(イセオシ)

クワツ石(滑石) 一口ガン石 一ロイノコト

四、段 水銀 一タニシ 一リウナフ

シヤクロク 一ケイフン 一タンシヤ

五、段 ヒサウ石 一ケイフン 一タンシヤ

ジヤカウ 一カツブン 一クワツロコ

六、段 カウメウタン 一シロイ物 一ケイフン

リウノウ 一カンスイ石 一ロガン石

七、段 カウメウタン 一カツブン 一、ロガン石

シロイモノ 一カンスイ石

八、段 コクフン 一ボレイ 一カンスイ石

タイシヤ石 一シロイモノ

△大ヌキニ、テヌク(拔)、タクイ(類)

一キシユ 一痔ノルイ 一穴草 一ルイレキ

一ナマス 一ハナタケ 一カシラヤウ 一井ボ

一アザ 一クチカサ 一シラクボ 一六ツユビ(六指)

(二紙裏)

一トリアシ 一シソコナイノ、ヤウ

一ヨロツ(万)、ノ、カサニ吉

△ウミナカシ

一クン、ロク、カウ 一リウコツ 一テン南星

一ウコン、右ノ分コ(粉)ニシテ、ウミノ、アル、トコロエ、カ

ケ(懸)ヘシ

△チヤウノ薬

一タンシヤ(丹砂) 一、クスノコ

一ニレノ木ノ皮 クロヤキ 一キワダ^{半分ソノママ}
一アラキバ クロヤキ 一イシミツ クロヤキ

右等分コニシテ、ノリニテ、ヲシ、合、ハコベ、ノ、シル、ニ
テ、イカニ(如何)モ、ユルレト、ト、トキ(溶)、テ、マワリ
ニ、ヒロ

ク、付カミ(紙)ヲフタニ、スル、ナリ

△ヨウノ葉

(三紙)

一ウシノカワ クロヤキ 一カヂメ 一川チシヤ(川地砂)

右等分マツシテ、マワリニ、付ルナリ

△同葉

一花^{ハナ}、ワラビ、 クロヤキ 一金ムクラ^{カナ} 一シヤクロク^{ニシノコト}

右、ハコベノ、シルニテ、シヤクロクヲ、四色トモ、コ(粉)
ネ、ウメズ(梅酢)、ニテ、マツシテ、三色、等分ニシテ、付也

△ヨコネノ葉

一ニレノ木ノ皮 ソノママ 一トリウ クロヤキ 一カカイモ

一クロツロコン 一大ムギ ソノママ 一コエントロ

右、等分ニ合、ウメ、ズニテ、ソクイ、ヲ、ノベテ、付ル

△キシユノ葉

一カツケ 一ヨコネ 一コブ 一イボ

(裏)

此ルイ、ノ、ヌキ葉 一クリノ花、モシナクハ

カチクリ一両 一ナカササゲ 一両コ 一ハイ(灰)

一ゴボウシ 一ハヅ アブラ、ヲ、トリ イツ、レモ、コ(粉)、

ニシテ

一カモノチ(血) 一カウムリノ、チニテ、コネ、ソクイニ

テ、ウリ、サ子、ナリニ、丸シ、シダイ(次第)ニ大キニ

シテ、イツレモ ヤマイ(病)ニ用也 但七日ノ

間、一リウ(粒)、ツツ、サス也、亦ハリ(針)、ヲ、タテテ
ソノ、クチ(口)へ、入、上ニカミ(紙)ヲ、付ベシ、キウ(灸)、
シテ

付ルトキハ、コク(濃)スリ也

△エグエンテンマテリヤ、ウミ、スイ

△アセテ、カウコ、セイラ、セ

一ヤサンホウノ汁 一井トコクサ^{ヲバコ}

(四紙)

一トウゴマ(唐胡麻) 一アラキバ 一ハスノハ

△エグ、エンテ、アマリヨ、疵^{キズ}、カウヤク(膏葉)

一アセテ、カウコ、セイラ マツ、ヤニ少

△エグエンテ、プランコ、イエ葉

一プランコトウツチ セイラ アセイテ

△エグエンデ、コロ、ラント、アカ葉

一アイロン、一カスカラ 一コロラアトンド

一アセイテ 一セイラ 一タモノアブラ

△エグエンテ、バルト

一カスカラ 一シンシヤ(辰砂) 一アイロン

一アセイテ 一セイラ 一カウコ

△エグエンテ、井エカウヤク、イロアカシ

(裏)

一シユ(朱) 一クワツ石(滑石) 一シヤクロク 一クワツ

ロコン 一カツパン

一クルカシヨ^{マツヤニノコト}、 一アセイテ 一セイラ 一ダモノアブラ

△エグエンテ、コロ、カウヤク

一百サウ(草) 一キハダ(黄蘗) 一シヤクロクにし

一アセイテ 一セイラ 一カウコ

△エグエンテ、イエ(癒)、カウヤク

一カンスイ石 一ビヤクロク 一アセニヤク

一クワツセキ 一ロクセウ(緑青) 一ロガン石

一ヒサウセキ 一クワツロコン 一カツブン

一ウキクサ 一ケイフン 一ボレイ

一ワウヘキ 一クロカシヨ、一ハクフン

一アセイテ 一セイラ 一タモノアブラ

(五紙)

△エグ、エンテ、ナスヒ、カウヤク

一ナスビ 三〇子リヤウ(量) 口伝 川二七日サラシ

サテ、トリ、アケ、水三升入テ、子ル也

△エグエンテ、イエ、カウヤク

一アイロン 一ヂヤコツ 一フクロ、ツノ

一キリンケツ 一ヒトテラ、一イカノカウ

一ホウキ、一コニク 一コタン

一チヤカウ 一タトウ、一アトント

一テンサウ、一アセイテ 一セイラ

△ブラン、タテ、アセ、エンテ、井口、ツケ薬也

一ハタカムキ拾五匁 一コムキ拾五匁 是ヲ、ヨク

アラ井(洗)テ、水、三升、入テ、天目二、一バイカ

(裏)

一バイ、半分ニセンシ(煎)、ツメ、サテ、亦ニテ、コシテ

アセ、イテ、ノアブラ、天目二一ハイ、亦ヨキ

サケ、ヲ天目二七分、入テ、モトノアフラニ

ナルホト、センジツメ、サテ、コノ中へ乳香、一匁

コニシテ、マエカト、ノ、アブラノ中、エ入、ヌノ(布)、ニテ

コシ、ツホ(壺)ニ入、是ハ三ツ口ノクスリ也

△アセエンテ、イノント、イタミ(痛)ノ、トキ、ヌル

一イノントノシル、拾ハイ、アセイテ、一ハイ

トウコマ(唐胡麻)ノ、シル、三ハイ、ヨク、センシ

△ハレ物内薬

一クヌキ大 一ニントウ大 一イノントウ大

一トチウ中 一カンザウ少 一モクツウ

(六紙)

△内薬、テライ(手負)ニ用ル、センヤク

一イノントウ少 一シヤクヤク少 一レイ大

一センキウ少 一カンサウ少 一チワウ大

△ブルウカ

一ハヅ、三両カワヲサリ 一カンキヤウ壺両 一スワウ二両

△キツケ薬

一レイ拾匁 一人参一匁、コニシテ、夏ハ水、冬ハヌルユ(温湯)

ニテ用

△カミ、ヌケタル、ハエ薬

一マコモノハイ五匁 一アマカイル五匁 クロヤキ

一カタツブリ五匁 黒ヤキ 一サイカチノミ、五匁、クロヤキ

一ウミノヒタイ草 一イノシリクサ 五匁

一シキヒノ、ハ、ノ、シル、天目二、二ハイ、一セウカ、ノ、シル、

一ハイ

(裏紙)

マエカトノ、フタイロ(二色)ノ、シル、トモ、ヒトツニ、入テ

アセイテアブラ、天目二半分、ノ、内エ入、センジ

ツメ、クロヤキラ、入テ、セイラ、ニテ、ネルナリ

△ラヤク薬

一 クシカキノ、サネ、クロヤキ 一 ダンノ 一 カン、サウ少
一 ロガン石ヤク中、一 ケイフン小 一 ヤウバイヒ中

カワラケニテイル

△ハシリ、クサ、ノ薬

一 ネスミノフンコニシテ 一 イノント、ノ、クキ(茎)ヲ、センジ
アラ井ミツヲ、トリ、サン薬ヲ、ヒ子リ、カクル也

△ツキ疵ノ、リヤウジ(療治)

一 ブランコ、アマリヨ スキハラヲ

チイ(小)サク、キリ、サキヲ、ボボケニシテ、ボボケニ

(七紙)

フランコカ、アマリヨヲ付ル也、アナエ、サシ入
ヲキテ、マワリニハ、マテリヤ、ヲ、ヌル、ヘシ
一日ニ、付ニメニ、付ヘシ

△キズ、チトメ(血止)、イエ薬

一 シヤクトフンヲ、チノ、出、トコロエ、ヌル也

アセイテ、アフラニテ、付ルナリ

△キズニテモ、シユ物(腫物)ニテモ、付薬

一 クチ、ヒロカラバ、井グチ、ノ、アセイテヲ、ヌル
ヘシ、アマリヨ、モ、ヌル、ヘシ、サイ、ヌル

△シユモツ(腫物)、口、ヒロクヌル薬

一 天南星、サメニテ、ヲロシ、ハレ物ノ、アナエ入
ナリ、クチ、ヒロクナル也

(裏)

△ナヲモ、クチ、ヒロク、ナラハ

一 テンナンセウ(天南星) 一 フクロツノ、サメニテ、ヲロシ
等分ニシテ、ヒ子リ、カクル也、スナワチ、口

ヒロクナル也、其後口伝ノウミ、ナカシ、ヲ付也
△タマ、矢ノネ、ヌキ薬

一 ケラヲ、クロヤキニシテ、如此丸・シテ、タチ
タル物ノ、アナエ、サスベシ、亦クチナキニハ、
キウ(灸)ヲシテ、其上ニヌル也

△腫物見様ノ事

一 井クル、シユ物、ミヤウ、ハクエ、サカル、トコロハ井
キ、タルハレト、ココロエヘシ

一 クエ、ユク、ヲ、トムルト、クエサカリ、タル所ニ

(八紙)

アセイテノアフラニテ、大ヌキ薬イカニモ、
ユル、ト、トキ、カラスバニテ、付ベシ、タ
ヘン、ツケテモ、キカスハ、二ヘンニテ、キカズ

ハ、二三日アイ(合)ヲ、キ、亦一ヘン付也、三ベンニテハ
八段ノ、井エ薬ヲ用ソ

△南藥百卷萬ミヤウ(妙)ノ事

一 ツキ疵、矢疵イツレ、モノノミ、ニワ、アマリヨ
ヲ、ノミ、半分ヨリ、サキニ斗付テ置

ナリ、其上ニ、亦、サクリ、カ子(金)ニテ、疵ノ
フカサヲ、寸ヲトリ、ソノ、ナガサ(長)ニ、ボン

ボリ(雪洞)ヲシテ、入也、是モ、アサ(朝)ツケ、テハ、
バン(晩)ツケ、一日ニ、二ド(度)付也

(裏)

キズナド、久敷イエ、カ子テ、アシキ、イエ

ジ、アガリ、タラバ、タバコノシルヲ、少、アマリ
ヤウノ、ナカエ、イノントノシル、クワエサテ付ル

一 キズツクロイ、申候ヲリ、目、マワスカ亦、チ(血)

ナドハシリ氣ワルク(悪)ワ、アヲキノネ(根)ヲ

コニシテ、ツ子ノ藥一フリホト、ノマ(飲)セテ吉也

一帯、トキ、ヨコネ、スル藥 青木、拾匁

參、コニシテ、夏ハ水、秋冬ハ スルユ 其後

帶、ヲ、トキ、ワキニ、ヨコネニ、サセテモ、不苦

一カメハナ、ノ藥 アセンヤク四匁 ゴバイシ一匁

タンハン二匁 ヲシロイ一匁 アツキ一匁

アサタ子一匁 クモハイ三ツ ウルシノクロヤキ五分

(九紙)

右コニシテ、アサシラゲニテ付ル也、亦、コマ(胡麻)ノア

フラ(油)ニテモ吉

一氣付之事 人參六匁 ホワウ四匁

シタンニ匁 コセウ(胡椒)一匁 カンソウ(甘草)二匁

ロツカク、クロヤキ少 右コニシテ、水ニテ用也

一腹腸出時、後ニ、ヒカエ藥ノ事

タウコマ(唐胡麻)ノミ、ヲ、皮ヲ去、コニシテ、アマリヤウ

ノ中ヘマセ、キツノ、クチノ、ウシロ、ノ、トヲリニ、

付也、亦ウシロ、ニハ、ワキニテ、ギシヤク、ヲ

タツルモノ也

一ムシ、シヤク、テライ、ナトノ、煩、ム子エ、ツキ

上タルニ、ヨキ藥ノ事

(裏)

コセウ(胡椒)二匁 コウボク(香水)拾匁 コワウレン五匁

右、コニシテ、丸、ユニテ、五拾粒ツ、一日ニ、三ト(度)用

也

一テライノ、ハラノ中、ツマリ候ハ、シユキ(腫氣)サス、大事

アリ、其時少、下ヲ用也、八ツ、ス(酢)ニテ、ニル

大ワウ(大黃)二匁 カンキヤウ四匁 右コニシテ、丸、用

下リ、カネバ、セキセウ、ヲ、センシ、其後、下藥

ヲ用、是モ五リウ(粒)ニ、一リウ(粒)、ホトハ、ユニテ、

一テライ内藥 イノントノミ カラキヒ少

アヲキ大 センキウ少 シヤクヤク少

チワウ大 右センシ用

一ハクサノ藥、ノト(咽)ノイタミ(痛)、イツレニモ、ヨキ、也

丁子少 アイロン大 セキリウヒ コセウ(胡椒)少

(十紙)

右キサミ、(刻)サカツキ、ニ、サケ三ハ、入テ、一ハイニ

センシテ、フクミ(含)候、内エ、シル、イラザルヤウニ、ソ

ト(外)エハ、キ、イタス也、一日ニ、三ドツ、亦イツ

レニモ、カウノト、センシツメ、トリノハニテ

ハノマワリ(周)ニ、ヌル也

一アヲカウヤク タバコノシル 二升

ヤシヲノアブラ、一升 ロウ 百拾匁

ワカノアブラ 二十匁 右一ツニシテ、少、アワセテ

ヌノ(布)、ニテ、コス、ミズケ、ナキ、トキ、ロウヲ入

一ハス、マメガサ、キズナトノ、イエカ子タルト

キ、チヲトリテ、用入藥ナリ

白サタウ(砂糖)半ギン(斤) コヲリサタウ(氷砂糖)

(裏)

コヲリサタウ、ナクハ、クロサタウ(黒砂糖)、ヨシ、

右二味ニテ、一斤入、サタウ、ヲケニ、水拾八

ハイ入テ、五ハイ(杯)ニ、センシ、サテ、アヲキノネ

カワヲ、サリ、人參二匁 ベニハナ(紅花)六匁

右三色入テ、センシ、亦ニハイ半ニ、センシ、ザ

クロノミヲ、三ツホト、入、サテ、ヌノニテ、コシ
ホ、ニ入、イキヲ、コメテ、ヒヤス也 ザクロノミ
チイサクハ、四ツホト、入也 上ノカワヲ、サリ
ミヲ、三十入也、ザクロナクワ、ヨキス(良酢)ニテ
モ、ヨシ、此薬、水ニテ、トキ、ハマクリガイ(貝)
一ツホト、用ル也

一耳ノ、ウツキ(疼)、ハレ(腫)ヲ、ヨクスル薬

(十一紙)

スシサバノ、目ヲ、トリイダシ、二ツニ、ワリ、カ
ウセンノアブラニテ、子リ、カミニテ、ボンボ
リ(雪洞)ヲシテ、サキニツケ、ミ、ニ入也

△エコ、エンテ、白キ、カウ、ヤク(膏薬)

一コマノアブラ、ヤシヲ、ロウ、フルキ、マツヤニ少

入子リ、合、キス シユ物 ウミスイニ、吉

△エコ、エンテン、アナ、ウメ、カウヤク

一コマノアブラ、ヤシヲ、ロウ、アイロン

クモノアブラ、タン、カスカラ少

△エコ、エンテ、コロリト、イエ薬

一コマノアブラ、タモノアブラ、ヤシヲ

タンハン、タン、ロウ、アイロン

(裏)

此カウヤク(膏薬)、ワ、シユモツ(腫物)ニク(肉)、ヲ、キリ、

イエ

シ、モ、アクル也

△大ウミスイ、コウヤク

一コマノアフラ トウゴマノアブラ ヤシヲ

ロウ、タンハン少 アヲタハコ
アサシラケ
ハスノハ 此シルニテ、子ル也

△三ツ、ロ、ツクロ井、ヤウノ事 人ノ油ヲフチニ
ヌルナリ

一ハタカムギ 拾五匁 コムキ 拾五匁 ヨク、アラ井

水三升入テ、天目二、一ハイ、ヨキ、サケヲ

天目二、七分入テ、本ノ段ニナルホトニ、セン

シ、ツメ、サテ、亦ニウカウ、一匁コニシテ、マヘ

カトノアブラノ、中エ入、布ニテ、コシ(漉)、ツボニ

入テ、ヨク、ロヲシ、水ニ入テ、イカニモ、イ

(十二紙)

キ(息)ヲ、コメ(込)テ置也 ヤシヲノアブラ、ナクハ、

コマニテモ、ヨキ也

△三ツ、ロ、ツクロ井、ヤウノ事

一先両ノワキ少ツ、キリテ、三所ヌウ(縫)

テ其上ニ、井カニモ、フルキ布、シホケ(塩気)ノ

ナキヲ、クチノ、ハ、タケニ少、ヒロク、キツテ

薬アフラ、ヲ、付少サマシ、ヌウタル上ニ

ニヘン、キセ、其上ニ、マタ、ヨキ、サケヲ、アタ、(温)メ

シヲ、ヌノ(白布)、ニ、シメシ(湿)、一ヘン、キセ、其上ニ亦

タマコ(卵)

ヲ、ワリ、白キ所バカリヲ、サラ(皿)ニ、ウツシ、カ

ミ(紙)ニテ、シメシ、一ヘン、キセル也、合シテ、サカシ

ヲ、カミヲ、ヲク也

(裏)

ヌイ、ヤウノコト、ニク、ト、カワノ、間ヲ、スク

イ、ヌイニ、ヌウ也、其糸ヲ、トク、トキハ

キリ、タル、日ヨリ、三日メニ、中ノイトヲ、キリ

テ、トル也、四日メニハ、上ノイトヲ、キリテ

トル也、五日メニ下ノ井トヲ、キリテ、ト

リ、フタヲ、付、カユルナリ、其時、サケヲ
 アタ、メ、カミニ、シメシ、マエ、カトノ、ツケタル薬
 ヲ、ヒヤ（冷）カシ、ソロ／＼ト、取テ、亦薬ヲア
 タ、メ、マエカトノゴトクニシテ、付也、此人ニハ
 三日四日ノ間ハ、ワリ（割）ノカユ（粥）ヲ、クワセ、ハラミ
 タル、女ヲヨセス也、井トワ、クワコ（桑子）ノイト、
 ナリ、トウ井ト、モ、クルシカラス

（十三紙）

一キズ、井タミノ、時、ノ、引薬也、イノンド
 タウゴマ、アサシラケ、アヲキバ、ヲバコ
 ウ井キヤウ ヤサホウ、此、シルヲ、カス（滓）ノ
 ナキヤウ（無様）ニ、シボリテ、アカカ子（赤銅）、ナベ（鍋）、
 ニテ

井レ、センシ、ミヤウハ、火ニクベテ、バツトタツ
 ガ、ヨシ、ツホニ、入、ヤシヲ、ヲサシテ置也
 一キズ、ヌイ、ヤウノ、コト、一寸、五分ノ、キズ、ヲバ、
 五分、カケテ、ヌウ也、サテ、サイテ、ヲ、入
 アイロン、ヲ、カケ、マツ、チヲ、トムル也、ニクト
 カワノ、アイヲ、ヌウ、モノ也、フカサ、二寸ノ
 キズ、ナラバ、七分、カケテ、ヌウ也、イトノ
 トメ、ヤウハ、モヂリ、トメニトメ、ル也、ハシ一寸ホ、

（裏）

トツ、ダシテ、井トヲ、キル也、イトワ、クワ
 ゴ（桑子）ノ、井ト也、其上ニ、白カウヤク、ヲ、カミニ
 付置、三日ノ、チ、ホトキノ、ヲリニハ、井トヲ
 キリ、サテ、其後、イキ、イテ、申トキ、ワ
 アカキ、カウヤクヲ、サイテニ、ヌリ、ヲ

ク（奥）へ入也、マエ、カトノ、ヤウニ、ノチニハ、スベシ
 一コブ、ワリヤウノコト、マツ、十文デニ、ワリ
 其後カギニ、カケ、キリ、マワシテ、トル也
 アク、ニク、ノコリ、タラバ、ヤキ、カ子（焼鉄）、ヲ、アツル
 ナリ、其中エ、アイロン、ヲ、ウチ、サイデヲ
 丸クシテ、本ノコブヨリハリ、上、ヌウ也
 其後、イトヲ、キリ、サイテヲ、トリ、イ

（十四紙）

ダシ、亦、サカシホニテ、アラ井、サイテヲ
 ウスクカケ、アイロンヲカケ、カウヤク
 ヲハリ、ニワトリ、ノ、タマゴヲ、カミニ、ヌリ、置
 其上エ、サカシヲ、カミヲモ、ヲク中ニ〇イ、
 テキハ、アカキ、カウヤク、ヲ、サイテニ
 ヌリ、中エ入也、其上エ、右ノ段ニ仕上
 但キンサウ、モ、シユモツモ、同前也

一デカケ、チャウ、ナトハ、中ニ、キウヲ、廿、ホ
 ト、スル、モノ也、ソレ、ヨリ、内ニテモ、クルシ、カ
 ラス、其時、クロ薬ヲ、ス、アサシラケ
 ノ、シル、等分ニ、シテ、四方ヨリ、引也、ク
 チ（口）、イテキ、タラバ、アヲキ、カウヤク、ヲ
 （裏）

クチニ付、ナラスナリ、但モヤウニ、ヨリ、イ
 ツモノ段ニ、スルコトモ、アリ、フチ、タカクハ、
 ヒキ、刀ヲ、アテレハ、サガル也、但、サ、バリ
 モ、クルシカラス
 一サウ、ジテ、シユモツ、ナヲシ、ヤウノ、コト、
 クロ薬ヲ、一ヘン、ヌレハ、ウメハ、腫ル、チレハ

其マ、チル、腫ルト、ミタラハ、中へ、クチヲ
アケ、ア井ロンヲ、生ニテ、カケ、白、カウヤク
ヲ、付置也、三日斗ニワ、下、モノ也、ソノ
時、イツモノ段ニ、シカクル、モノ也

一フキ薬 タンハン、コマカニ、ヲロシ、能米ノスニ
テ、天目ニ、一ハイノ内エ、右ノ薬二分、アテニ

(十五紙)

加、カキ、タテ、水ハヂキニ、入、申也、是ハ
シュモツ、イノ、フエ、クサリ、イリ、タル、カ、イ
マタ、クサラヌカ、ヲ、ミル、クスリ也

(裏)

一大ワウ ニンドウ クヌキ カンザウ

ワウレン ワウゴン センキウ レンギヤウ

デンカウ ヨウキ物ニハ、人參ヲ加エベシ

一ニシユノ薬 大カメノ頭 杉ノヒテ、真羽

イツレモ、クロヤキ、ヲシロイ少

此薬、カミノアブニテ、子リテ、付ル也

一氣腫、カサケノ、内薬、ブクリウ一匁

人參一匁 ゴシツ一匁 カンサウ一匁

メウハン一匁五歩 サンキラ井拾五匁 其俣

サンキラ井拾五匁 コ色 同拾五匁 クロヤキ

右、コニシテ、一フクニ、八匁ツ、

一ノトケ、フキ薬 カキドヲシ

(十六紙)

クマタカノハ、もしなき時は、まば
にても、くるしから須候 ア井ロン

一トケヌキ薬 マユミ カキノキ ナシノキ

右、クロヤキニ、シテ、サケ、ニテ、用ル也

一クジキノ薬 シブキヤウ サメニテ
ヲロシ ヲシロイ少

コンヤ(紺屋)ノのりにて、おし合つくる也

一白シタノ薬 クワノコケ、シモ ウナガウシ 黒ヤキ

右、コ、ニシテ、付也

一、ホネツキ薬 イシカメノカウ、二分

カウカノ木 二分 イタメカワ 三分

何モ、クロヤキ也 ヨキ、スニテ、メシ、ツフ(飯粒)ヲ、合付

一同ノミ薬 井シミツ カウカ 等分ニ

シテ、サケ、ニテ、用ル也

(裏)

一同アラ井薬 アヲキバ、テ、一束ニ、キリ

カウカノハ、スルメ、壹枚、入、センシ申也

一カミカサノ薬 ラ井クワン大 セウノフ(樟腦)中

ミヅカ子(水銀)大 右、合、カミノ、アブラニテ、付也

此ヤク、ハ、クツスリニ、ヨキ也、キズノ、イエ

カ子ルニ、モ、ヨキナリ

一コシタノ薬 コブ 花ノカス ドリウ

等分ニ合ヘシ

(十七紙)奥紙

②『鉄炮之大事』の考察

1 守田神社所蔵『鉄炮之大事』の特質

(1) 『鉄炮之大事』の構造

これらの文書群は、一括して守田神社本殿内部に黒箱に納入されて保管され、神社総代の下で氏子会議の許可と同席によって閲覧しえたもの

である。「南蛮流秘伝一流」は、綴葉装の冊子で、原状のままであるが、それ以外の文書群はすべて裏打紙によって表装されている。「天正文書『第一号』」「文禄文書『第二号ロ』」などの文字は、「信濃史料」編纂にともなう整理や表装にともなうものと考えられる。聞取調査では、これらの古文書群は、守田神社の元宮司屋嶋家から神社に寄付されたものであること、守田神社の宮司は江戸時代には屋嶋氏であったが、それ以前は畠山氏、その前は佐々木氏と伝承されていること、屋嶋氏の子孫はいまも神社に隣接して屋敷を構え存続していること、表具がいつなされたかは不明であること、等が判明した。

これらの古文書群を整理すれば、天正十九年のものが二点、文禄三年のものが九点、文禄五年のものが一点、慶長十年のものが一点、元和元年のものが一点、であり、『南蛮流秘伝一流』のみ冊子本で無年号ではあるが同時代のものである。つまり、天正から元和年間という中近世移行期における鉄炮と呪術に関する技術書合計十五点が時代の推移にそって作成され、相伝されてきたことを物語っている。

しかも、「天正文書」とされた二点は、火薬の「調合次第」を記した全くの技術書と、守田明神の祭文ともいえるべき呪術的宗教的な作法書とがセットで相伝されたことがわかる。こうした特徴は、九点の文禄文書にもいえることで、二点がまったくの調合次第の技術書、ほか七点が呪術的宗教的要素をもった作法書といえる。これらを整理すれば、次表のようになる。

(年次)	(技術的史料)	(作法書)
天正十九年	正月火薬調合次第	正月吉日守田明神祭文
文禄三年	火薬調合次第并作法 火薬調合次第	鉄砲奥大事 鉄砲位名事 鉄砲打様大事

文禄五年	鉄砲大事
慶長十年	四方固大事
元和元年	鉄砲立はし大事
無年号	鉄砲九ツいろはうた大事 人形祭文 不動祭文 鳥目當事 南蛮流秘伝一流

つまり、これらの文書集合は、天正から元和年間にかけて作られ、宮司屋嶋家によって代々相伝され、守田神社に寄贈され、そのまま現在にまで至ったものと考えてまちがいない。しかも、内容面からみると、天正・文禄年間の文書には技術書性格が強く、慶長・元和と時代が進むにつれて、儀礼的呪術的作法書になっており、技術の教本化・伝書化を示すものとして注目される。

(2) 発現期における鉄炮の技術書
では、つぎに、本史料群の鉄炮之大事がこれまで知られているものの中でのいかなる時代的特質をもつものか、検討しておきたい。

これまで鉄炮の技術書については、宇田川武久の研究が詳しい。最新の見解によれば、戦国時代の砲術秘伝書として、永禄二年鉄放薬方並調合次第(上杉家文書)、永禄十二年玉薬調合次第(個人蔵)、天正十三年玉こしらへの事(歴博蔵)、文禄三年鉄砲の大事(守田神社蔵)の四点をあげている。⁽⁶⁾ これらを参考に管見に及んだ中近世移行期の砲術秘伝書を整理すればつぎのようになる。⁽⁷⁾

永禄 二年(一五五九) 六月廿九日 鉄砲薬之方并調合次第 上杉家

文書

永禄十二年（一五六九）三月十五日 玉薬調合次第 所莊吉所蔵

天正十三年（一五八五）六月吉日 玉こしらえの事 国立歴史民俗博物館所蔵

物館所蔵

天正十九年（一五九二）正月二十三日 調合次第 守田神社文書

文禄三年（一五九四）二月吉日 鉄砲之大事ほか九卷 守田神社文書

慶長二年（一五九七）正月吉日 口薬方ほか（田付流秘伝書）所莊吉所蔵

慶長四年（一五九九）六月吉日 求中集五卷 大阪城天守閣所蔵

慶長六年（一六〇二）十一月九日 目当定 大日本史料十二

慶長十二年（一六〇七）七月吉日 一返一流書・極意書・大極意書

所莊吉所蔵

慶長十七年（一六一二）三月吉日 鉄砲放様目録（稲富流秘伝書）国立歴史民俗博物館所蔵

慶長十八年（一六一三）八月吉日 初学抄（宇多流） 東京国立博物館

館

元和 元年（一六一五）二月吉日 鳥の目当事 守田神社文書

この表から時期区分ができ、第一段階は、永禄二年の初見史料から天正十九年のものまで、すべて火薬の調合次第を記した技術書である。これは、鉄砲の使用にとって絶対不可欠な火薬の調合法を伝達することが、第一段階の伝書のもっとも基礎的な役割であったことを物語っている。

しかも、その基本技術は単純な調合次第として、技術知識のみが単独で相伝されていたことがわかる。きわめて実用主義的な技術体系の伝播であったといえる。戦国期の軍役賦課の古文書にも火薬調合についての指示があることも、「もの」としての鉄砲とともに火薬調合が伝授され

ていたことが推測される。呪術的性格が希薄であることが特徴といえよう。

第二段階は、文禄から慶長年間になってようやく、鉄砲の取扱い方と火薬調合法が作法として体系化し、伝書に仕立て上げられたことがわかる。これまでの研究では慶長二年（一五九七）正月吉日 口薬方の田付流秘伝書（所莊吉所蔵）がもっとも古く、次いで大阪城天守閣所蔵の「求中集」もやはり、近江国田付村出身の田付兵庫助景澄の著作とされる⁽⁸⁾。

慶長六年十一月九日に稲富一夢が岡本半介に宛てた「目当定」も、慶長十二年の稲富一夢直家の著作である「一流一返之書」に含まれているという⁽⁹⁾。こうしてみれば、守田神社所蔵の文禄二年鉄砲大事ほか九卷が、体系化されまとまった文書群としてはもっとも最古のものということになる。いいかえれば、鉄砲技術の体系化と教育知識の相対化は、戦国時代ではなくそれよりもおくれで、文禄・慶長年間になってからはじまったものであったことがわかる。守田神社の文禄三年鉄砲之大事は、これまで知られている鉄砲師の田付流や稲富流の伝書よりも古いものであり、全国最古のものといわなければならない。しかも、天正・文禄・慶長・元和というそれぞれの相伝書が残存しており、中近世移行期の砲術秘伝書の成立過程とその変遷がわかる伝書群であるといえよう。

これまで知られている砲術秘伝書は、宇多流・稲富流などいずれも江戸初期の砲術師・武士層に伝来したものばかりである。それに対して、守田神社所蔵の鉄砲之大事は、在地寺社の神主家に伝来したもので、「守田山別当」「モリタノ明神」などの記述からみられるように、修験者に相伝された砲術秘伝書といわなければならない。このことは、戦国末期から慶長・元和年間にかけて、鉄砲という最新技術が大名権力によって上から再編成された流れとは別に、民間の在地世界の中で修験者によって相伝されており、それゆえ、戦争の殺人技術としてよりは、鳥獣の狩猟技術としての鉄砲技術が伝達していったことを物語るものといえ

るのではなからうか。前者を大名権力に編成された技術体系といえるのに対して、後者は民間の在地世界に不可欠であった生業のための技術体系と概念化することができよう。この点は、江戸時代の民間鉄砲を狩猟や鳥獣駆除の道具として位置付けようとする塚本学の視点¹⁰にもつらなる問題といえよう。本書の「鉄炮之大事」は在地の民間において今日まで相伝された鉄炮技術書といえよう。

2 鉄炮之大事にみる技術と呪術の二面性の特質

(1) 調合次第の技術論

これまで、鉄炮技術を示したもので最古の文書は、上杉家文書の永禄二年(一五五九)六月廿九日「鉄炮薬之方并調合次第」である。この文書は、室町將軍家の奉行人大館晴光副状とともに將軍義輝から上杉謙信に与えられたもので、公方御藏であった粉井が伝えたものであることが明記されている。

巻首の部分は

鉄放薬之方并調合次第

一、ゑんせう 二両二分、

一、すみ 一分二朱、

一、いわう 一分

又

一、ゑんせう 一両二分

一、すみ 一分

一、いわう 三朱」

末尾は

「猶口伝粉井に申合候也、以上」

とある。この「粉井」に注目したのは、永原慶二である。永原は、粉井が足利將軍家の公方御藏で、ただ一人俗体で奉行的性質をもった人物であったとし、この調合次第を上杉謙信にもたらした人物こそがこの秘伝書にみえる粉井であり、彼は「足利將軍の使者であり、文書の発信者は將軍義輝その人であると考えられる」と指摘した¹¹。室町期の粉井については、久を通字とする一門で、大木・井原・芝山らの被官をかかえ、土倉で公方御藏だけではなく、御料所の代官であり、細川などの吹挙で寺領公文職などを補任され、勘合符や金印の管理にあたり、貿易・商業・流通活動にも関与する国人的性格をもった家政権力であったことを指摘したことがある¹²。粉井の家政権力は、商売物の商業流通や幕府や寺社領などの領主財政・年貢出納関係に従事するだけではなく、そこから債務・貸借関係や貿易・外交関係にも関与し、鉄炮や火薬調合という最先端の技術革新の相伝・伝達に関与し、將軍家と戦国大名との政治交渉の奥深い機密事項にも関与しえたことがわかる。こうした先物買い投資と冒険商人的性格を濃厚にもった人物が畿内の国人層から成長したのであり、この時代特有の性格を持った存在である。この中から、堺・博多・敦賀・品川などのような地方都市の豪商や商人頭などが搬出していったのである。

守田神社文書の天正十九年の史料も、その文書様式がこの上杉家文書とまったく同一である。いいかえれば、この天正文書は、もともとも早い時期に鉄炮に必要な火薬製造法を記した純粹な技術書であったことが確認できる。戦闘用の鉄炮の使用にとって、火薬の調合次第は必要不可欠であり、それなしには鉄砲は無用の長物にほかならない。戦闘準備が急務であるほど、火薬調合次第は純粹に技術的なものとして伝達・普及したものといえよう。しかし、中世では技術は技術のみで相伝されることがなかった。

(2) 和歌による神聖・呪術性の付与

この技術書としての火薬調合次第とセットで、天正十九年正月吉日の日付けをもつ守田明神祭文が伝来している。その内容は、和歌であり、呪文文言や梵字もない。しかし、その内容は、「ユメノチカイノ大事」¹² 夢の誓い大事や「可秘」とあるように、短歌による呪文や誓文であり、秘密性を強調している。「シヤクチャウ」は錫杖のことであろう。この天正文書は「清浄心」・「三寶」・「六波羅密」・「菩薩」などの仏教的要素と和歌とが混在した呪術誓文というべきであろう。「夢の誓い大事」とは、夢想のなかで明神が読まれた誓文という意味である。これらは、守田明神の誓文と信じられ、それが「三返ツ」とあるごとく、山伏らの呪文として伝授されたのであろう。

中世では、短歌・連歌は、法楽和歌に代表されるように神仏と人との夢を通じて交感するものであった。連歌と夢記とはよくセットで記録に登場する(『康富記』『親孝日記』等)。和歌・連歌と夢想とは、密接な関係があり、藤原綱光も北野社一万句で夢想で拾物における第三作の担当に命じられたとして、法楽連歌百韻を沙汰している(『綱光公記』文安五年八月十五日・廿四日条)。文学の呪術化・神秘化といえよう。

以上から、中世末期に火薬調合次第は、連歌・和歌によって神仏と交感する神秘の世界と一体になって相伝された世界が存在していたことがわかる。守田神社には、この鉄炮之大事とは別に和歌短冊が伝来する。金砂子・銀砂子散らし、金泥下絵、銀泥遺霞の短冊につきようにある。

「思ひあれば、袖に、ほたるを、つつみては、

いはくや物を、とふ人もなし」

極が残されており、「割丸印 勅筆 (破損) 院 方形印 (禁山印) 思ひあれば」とある。これは江戸時代の古筆家の鑑定書である。院の名

前をわざと破損したのは、江戸時代の国学高揚期が戦争中の国家神道期になされたものと考えられる。守田神社がこうした上皇の和歌短冊を相伝していること自体、中世の法楽和歌が神社と強い結びつきをもっていた歴史的伝統であったとみななければならない。

しかも、天正十九年守田神社祭文が短歌になっていることは、鉄炮の伝書を神の法楽和歌によって権威づけようとする中世的世界観の存在を示しているものといえよう。

(3) 密教による神秘性・呪術性の強化

文禄二年の鉄炮之大事になると、こうした和歌や連歌による神秘化・呪術化はなくなり、むしろ、密教思想や陰陽道的思想による呪術化・神秘化が強化されている。4の「鉄炮之大事」は、「金胎両部」の密教思想によって説明され権威化されている。ここでは、「末世の世となり子が親を殺し親が子を殺し悉く鎮まらざるゆへに」こうした末世の世界を鎮めるのが鉄炮の役割であり、「日本大千世界の弓矢を納める」ために伝来したと正統化する。とりわけ「鉄炮に当たる物は人間によらず鳥類・畜類までも皆悉く仏果に至り即身即仏疑いあるまじ」と説く。鉄炮による殺害の正当化の論理が仏教の教理によって説かれる。中世仏教において、殺生を正統化する教理は、大慈悲を起こして極悪人を殺すのは地上の菩薩の所行とされ、命の軽重も涅槃経によって正統化されていた。鉄炮による殺人や狩猟が仏教的アジア世界観と密教思想によって正統化されるのは、文禄年間になってからであることが判明して興味深い。

「鉄炮奥の大事」も、鉄炮は天竺・唐の「無意志」による作で「金剛界、胎藏界の金にて彼鉄炮を作たてへし」、「人作にあらず悉く仏のしるし給ひけり」とし、「その功力によりて已に阿鼻無間地獄の苦を逃れ率内院に成仏疑いなし」と殺人・殺生を正統化する教えを説く。鉄炮という技術が無人格であることを中世人は認識していたのである。鉄炮の放

ち手に対しては「鉄炮を手にとり、生有る物を撃つ時は、此経を読むべし」とする。いまや鉄炮の伝書は、火薬調合や技法よりも、仏教による殺人・殺生を正統化する論理を教える經典に比重を増している。しかも、この文禄二年の文書群は、薩摩国人で商人であった岸和田なる人物が鍛錬して岸和田流をはじめたという言説をもっている。商人が鉄炮の技術の伝達者として評価され、言説化されている。このことは、將軍家・上杉謙信への鉄炮と火薬調合法の伝達が、公方御蔵の粉井氏によってなされたことと対応しており、中世商人の軍事的性格を物語っており、注目すべきである。

(4) 祭文・作法書の重視―調合次第の退化

文禄から慶長年間になるとさらに呪術化・經典化が進展する。文禄五年の人形祭文と慶長十年不動祭文では、梵字が登場し呪術の呪文と化する。もはや鉄炮之大事は技術や技法の伝授よりも、呪文や呪法の伝授の性格を強めている。

元和元年の伝書は、大半が作法書であり、調合次第はわずかに四行にすぎず、二種類の火薬調合を示すにすぎない。一巻の書の中に、作法書と技術書の両者を合理的に混在させるまでに簡略化されていることがわかる。慶長十年守田山別当の不動祭文は長文になり、鉄炮伝書の技術的側面はきわめて希薄になっている。

一般的にこれまでの通説では、中世の技術は呪術性が強く、時代が進んで近世になるにつれて呪術性は希薄になり、技術重視の思想が強まるものと考えられる。しかし、本稿の検討から、歴史の実態はもっとジクザクな過程で、戦国期は鉄炮そのものとセットで火薬調合法が技術として伝授されるがゆえに技術的性格が濃厚であり、近世初期の伝書ほど呪術的性格が強いことが判明したといえる。

いいかえれば、中世後期の戦国期に鉄炮は実際の戦争のための軍事技

術・軍事科学であり、殺人兵器であったがゆえに、鉄炮之大事も火薬調合や放手の姿勢や技法など技術的性格を濃厚に持たざるを得なかった。

しかし、文禄・慶長・元和年間と時代が進み、戦争技術としての鉄炮の非実践性が強まると、むしろ狩猟技術化しはじめたのである。それゆえ、殺人とともに鳥類・畜類の殺生技術となり、むしろ殺人・殺生を正統化する呪術・呪法を伝授する作法書としての性格を強化せざるをえなかったものといえよう。今回紹介した『鉄炮之大事』が守田神社という修験者の神官の家に伝来したものであるが故に、そうした性格をより強固にもっていたものといえよう。そこに大名家の炮術師が伝えた炮術秘伝書との違いともいえよう。なお、宇田川によれば、炮術史の観点からみると、狩猟技術から軍用へと移行したものであるという。だとすれば、修験者に伝来した鉄炮之大事の世界は、炮術史の世界と異なった道を歩んだ可能性がある。その点を含めて、今後の研究の進展を見守りたい。ただ、技術が軍事技術としての実践性を喪失するにつれて、呪術性・神秘性を強化するという技術と呪術の逆転現象は中近世移行期の基本的な流れといえよう。民俗学の世界でもイザナギ流などに鉄炮の伝書が伝来するといひ、きわめて呪術的性格が強いことが指摘されている。¹⁴⁾近世社会における技術と呪術の相関関係がどのようなものであるのか。おそらく、中世社会よりも呪術性が強化されている側面が存在するのではないかとの推測がなりたつが、その点を含めて今後の研究課題としなければならない。

③『南蛮流秘伝一流』の考察

1 守田神社所蔵『南蛮流秘伝一流』の特質

(1) 『南蛮流秘伝一流』の内容

「南蛮流秘伝一流」の内容は、南蛮流炮術・南蛮筒の伝書ではなく、

医薬の膏薬製造法と投薬方法、手術法などを具体的に記述した医薬書である。しかも、その内容は「タマ、矢ノネ、ヌキ薬」とか「一ツキ疵、矢疵」についての医療技術や投薬法を具体的に記載している。「タマ」は鉄砲玉、「矢ノネ」は矢疵、「ツキ疵」は槍疵のことであるから、戦国争乱での戦死者・戦傷者の治療技術として不可欠なものであったといえよう。いいかえれば、医療・投薬法という医療技術が鉄砲の大事の一環として民間に普及していったことは、当時の社会的必要性からみても整合的に理解することができる。鉄砲の技術は、火薬の調査から化学的知識を必要とし、それが治療法として医療技術や投薬の薬学的知識と一体化していたことがわかる。それゆえ、「鉄砲の大事」と『南蛮流秘伝一流』とがセットで民間に流布し普及していたのも当然といえよう。

本書の第二の特質は、疵の治療法として、縫合術や手術法を記載し、日本における戦国期の外科手術法を明記していることである。

「一キズツクロイ申候ヨリ、目マワスカ亦チ（血）ナドハシリ氣ワルク（悪）ワ、アラキノネ（根）ヲコニシテ、ツ子ノ葉一フリホト、ノマ（飲）セテ吉也」とは、疵を縫う外科手術に伴う対処療法とみてまちがいない。

「三ツ、口、ツクロ井、ヤウノ事、一先両ノワキ少ツツ、キリテ、三所ヌウ（縫）テ其上ニ、井カニモ、フルキ布、シホケ（塩気）ノナキヲ、クチノ、ハバ、タケニ少、ヒロク、キツテ薬アフラ、ヲ、付少サマシ、ヌウタル上ニニヘン、キセ、其上ニ、マタ、ヨキ、サケヲ、アタタ（温）メシヲ、ヌノ（白布）、ニ、シメシ（湿）、一ヘン、キセ、其上ニ亦タマコ（卵）ヲ、ワリ、白キ所バカリヲ、サラ（皿）ニ、ウツシ、カミ（紙）ニテ、シメシ、一ヘン、キセル也、合シテ、サカシヲ、カミヲ、ヲク也」

これはあきらかに、外科手術による縫合法の叙述である。いわば、中近世移行期に民間にすでに治療法として手術法や縫合術など外科手術法

が存在・流布していたことを示している。これらは、中近世移行期における科学史の到達点として注目すべき事象といわなければならない。

第三の特徴は、いづれも「膏薬」の調合次第を記載しており、その投薬法が、膏薬を主体としていることである。「イエ薬」や「ヨウノ薬」などは「ハコベの汁にて、シヤクロクを四色ともこね、梅酢にてまぶして三色等分にして付也」とあるように膏薬にしている。「エリエンテクロカウヤク」は、名前自体がカウヤク＝膏薬である。

その材料には、「ヤサンホウノ汁」に「タバコ」とあり、あきらかにこの時期、ポルトガルによってもたらされたタバコが挙げられている。「クルカシヨ」には「マツヤニノコト」とあり、松脂が「クリカシヨ」と新名で記載されている。「ヤシオノアブラ」はヤシ油のことで、ポルトガル医学ではヤシ油がよく用いられたとする説と一致する。「氷砂糖」「黒砂糖」「コセウ」「胡椒、丁子、乳香」「ニウカウ」「アイロン」「カスカラ」などもこの時期、日本に輸入されたポルトガル商人のものである。

第四の特徴は、小便の利用など呪術信仰的性格が含まれていることである。小ヌキ薬は、明礬とヒサウ石と「小ベンノタマリ」を混ぜる。「カマキリ虫」「チクモノ腸」などが製薬材料とされるだけではなく、膏薬の製造法の中に「カモノチ」「コウモリノチ」＝鴨や蝙蝠の血で、粉を練ることが指示され、「ネズミノフン」「ケラ」の黒焼きなどが製薬材料と指定されている。これがどれほど科学的根拠をもつものかは今後の研究課題としなければならないが、全体的に呪術的性格をもたざるをえなかったことがわかる。『南蛮流秘伝一流』においても科学と呪術の両面が含まれていることはあきらかである。製薬術をもっていた近世修験者が小便を製薬材にもちいていたことは、これまでも指摘されている¹⁵。それらによると、安政年間の修験山伏の三浦命助は人や馬の治療に従事し、製薬のために修行と食事制限をし、人参や牛蒡・大根・山芋・ゆり・に

んにくなどを白湯で煮て食べ、小便をとって小麦粉に混ぜて仙水丸をつくっていた。いいかえれば、近世後期の修験者の製薬法は、天正・元和年間の南蛮流医書の技術と呪術の混在という性格を継承していたことになる。その解明のうえでも、この『南蛮流秘伝一流』は、近世の修験道における製薬術との比較検討の素材としても意義が高いといわなければならない。

2 南蛮流医書の研究課題

(1) 中近世移行期の「南蛮流医書」研究の現状

南蛮流医書についての旧説の到達点によると、弘治二年（一五五六）ルイス・デ・アルメイダが豊後府内で内科院と外科院の救済院を建てポルトガルの南蛮流外科医術を導入したこと、信長が永禄十二年京都に南蛮寺を建て、その医術が弟子らによって日本人による南蛮流医術がおきたこと。ポルトガル宣教師クリストファン・フェレーラ（一五八〇～一六五〇）が棄教して帰化した沢野忠庵が「南蛮流外科書」を作成しその写本が京都大学に所蔵されていること。その弟子半田順庵・吉田自休の吉田流、西吉兵衛の西流、ルソンで医学を学んだ栗崎道喜の栗崎流、元和五年（一六一九）刊行の山本玄仙「万外集要」などが流布したこと等が指摘されている。⁽¹⁸⁾

南蛮流医学と阿蘭陀医学との相互関係について、海老沢有道によると、南蛮流外科医書は、短期に阿蘭陀外科医書にとってかわり、「阿蘭陀外科医方秘伝」（阿蘭陀外科書）（慶応大学・九州大学・京都大学）「阿蘭陀加須波留秘」（千葉大学）や元禄六年（一六九六）刊「阿蘭陀外科指南」などが普及したこと。「阿蘭陀外科指南」は、沢野忠庵の南蛮流外科の文書をもとにしており、江戸幕府のキリスト教弾圧政策に配慮するため、南蛮という用語を避け阿蘭陀の用語を用いたこと、などが指摘されて、両者の交流があきらかにされている。⁽¹⁷⁾

こうした通説に対して、服部敏良によって批判が展開された。それによれば、アルメイダの府内病院は弘治三年（一五五七）に建てられたもので、その医術を受け継ぐ者なく自然消滅したとする。第二に、永正年間には矢尻など金瘡に対して気付薬と疵洗淨・癒薬・血止め薬などの金瘡医術が日本独自に発達し、長享元年「金瘡療治秘伝抄」や鷹取秀次の天正九年「外療新明集」などが刊行されていたとする。日本独自の金瘡医は、槍傷や矢傷など戦傷者の医療に際して、弾丸摘出手術や膏薬の塗布による治療をおこなっており、アルメイダの療法と大きな差があったわけではないことをあきらかにした。第三に、わが国に南蛮流医学が伝えられたのは外人医師や帰国した日本人医師によって江戸初期で、フェリラ・沢野忠庵以降で西洋医学をさすことなどの新説を提起している。⁽¹⁸⁾

最近では、薬学史の分野では、鉄砲の伝来とともにタバコが伝来し医薬として認識されていたこと。ポルトガル人のアラキ酒（ブランドー）が南蛮流医師に薬用や傷口の洗浄にもちいられ、傷口を縫合したあとはヤシ油で練った軟膏・膏薬がよくつかわれたこと。近代外科化学の父とされるアンブロアズ・パレの著書『火繩銃その他の創傷の治療法』は一五四五年に出版されており、その挿絵は宝永三年（一七〇六）榎林鎮山「紅夷外科宗伝」に写し取られおり、アルメイダを通じて日本に伝わったと考えられること、アルメイダの日本人の弟子としてキヨゼンやミゲル・内田トメーなどが確認され、南蛮流医学が広がったとする。⁽¹⁹⁾

アルメイダの外科手術についても、それは銃創の治療であり、この南蛮流といわれたポルトガル医学は、キリシタン禁令とともに姿を消し、オランダ医学の紅毛流医学にとりこまれ、紅毛外科カスバル流外科が登場するのだという。⁽²⁰⁾ここでは、アルメイダの継承者として日本人医師が特定されており、服部説の批判となっている。

近年では、南蛮流医書において膏薬が重視されていたことを再確認する見解が出されている。⁽²¹⁾宇田川の教示によれば、『南蛮流秘伝一流』に

記載された軟膏でつぎのものはあきらかに南蛮流の基本軟膏と一致するという。

エグデンテ	ブランコ	V. Vnguento Branco	白膏
エグデンテ	バルト	V. Verde	青膏
エグデンテ	アマリヨ	V. Amorello	黄膏
エグデンテ	クロ	V. Negro	黒膏
エグデンテ	コロラント	V. Cornado	赤膏

これらの諸点からも、この『南蛮流秘伝一流』が当時の南蛮流医書の影響下に作成されたものであることが明白である。

(2) 今後の研究課題

こうした研究史をみると、天正から元和年間にかけて、日本における銃創の治療法として膏薬の利用や瀉血・血止め・洗浄・縫合手術が独自に発達していたことがほぼ共通認識になっている。この膏薬の重視は、日本独自に発達した金瘡医によるものとする服部敏良説と、南蛮流医によるとする山崎幹夫説が対立しているといえよう。南蛮流医学は江戸初期沢野忠庵以降にオランダ医学と一緒に発達したとする服部説と、南蛮流医学は、江戸初期の紅毛流医学であるオランダ医学に先行してポルトガル人にもたらされたものでアルメイダの役割を高く評価する見解とが対立していることがわかる。いいかえれば、戦国から江戸初期にかけての中近世移行期における医学の状況をものがたる史料発掘と研究を蓄積することが重要になっていくといえよう。

現在知られている南蛮流医書は、『南蛮一流外科秘書』（京都大学富土川文庫）、「南蛮一流ケキヤウ金瘡」（東北大学狩野文庫）が知られるのみで、薬学に「南蛮一流之能毒」（東京大学）が、『日本国書総目録』に

記載されるのみである。

こうしてみると、守田神社所蔵『南蛮流秘伝一流』は、京大・東北・東大所蔵の南蛮流医書と一連のものとみてまちがいない。しかも、在地の山間地の修験者によって相伝されてきたものである点でも、中近世移行期の南蛮流医学が民間の修験者によって伝達されてきたことを物語るものとして貴重であろう。とくに、膏薬の重視や金瘡医学について、再度『南蛮流秘伝一流』をみてみれば、南蛮流といいながら、針治療や灸法を併用しており、日本の室町期の金瘡医学との共通性がみられる。「チヲトリテ用入薬」などと瀉血法との併用をすすめているし、「天目」「カワラケ」「サカズキ」による煎じ薬の製法など、日本中世の伝統治療法が混在している。

『南蛮流秘伝一流』の「キズ、ヌイヤウノコト」では、「アイロンヲカケ、チヲトムル」というようにアイロンによる止血法をのべ、「コブワリヤウノコト」では、「ヤキカネ」の使用法を述べている。これはポルトガル医学と室町時代の日本古来の金瘡医とが同居していたことを示すものである。「キンサウモ、シュモツモ、同前也」との記述は「金瘡も腫物も同前也」という意味であろうから、あきらかに室町時代の日本独自の金瘡医の技法が、この『南蛮流秘伝一流』の中に混在していたといわざるをえない。拙著の「中世社会の養生観・死生観」でも仏教と医学との関係について触れたが、室町期以来の金瘡医の医学が仏教思想と結合してどのように中世的展開をみせていたかは今後の研究課題としなければならぬ。

こうしてみれば、南蛮流医学とは、単純にポルトガル医学の伝授とはいえず、日本で独自に形成されてきた室町時代の中世金瘡医学を組み込んでいたことになり、そこにポルトガル医学が混在したものとななければならない。もちろん、本資料とバレ『火縄銃その他の創傷の治療法』との関係、ポルトガル医学の独自性という内実をあきらかにすることは今後

の研究課題としなければならない。今後の共同研究が期待される。

註

- (1) 勝俣鎮夫『戦国時代論』岩波書店一九九六・桜井英治『日本中世の経済構造』岩波書店一九九三
- (2) 平雅行『鎌倉仏教論』(岩波講座日本通史 第8巻中世2)一九九四
- (3) 拙論「中世の呪術と神仏崇拜」「中世民衆の呪詛・神罰との闘い」(『中世寺院と民衆』臨川書店二〇〇四)
- (4) 『長野市誌』『旧市町村編』『原始古代中世編』長野市一九九七・二〇〇〇
- (5) 拙論「戦国・織豊期の乙名衆と海運・鉱山・地方経営」「中世のいくさ・祭り・外国との交わり」校倉書房一九九九
- (6) 宇田川武久『鉄砲と戦国合戦』(吉川弘文館二〇〇二、一六頁)
- (7) 江戸初期の砲術秘伝書については、宇田川武久『江戸の砲術』(東洋書林二〇〇〇・一九頁)等参照。
- (8) 宇田川武久『鉄砲と石火矢』(日本の美術三九〇・至文堂 七二頁)
- (9) 宇田川武久『前掲(8)書』七一頁。
- (10) 塚本学「農具としての鉄砲」「生類をめぐる政治」(平凡社選書一九八三)
- (11) 永原慶二『戦国時代―16世紀日本はどう変わったのか』上、小学館、二〇〇〇、一一八頁
- (12) 拙論「中世後期における債務と経済構造」(『日本史研究』四八七、二〇〇三)
- (13) 『広疑瑞決集』(拙著『中世寺院と民衆』二五九頁)。なお、中世仏教が殺人をどのように正統化していたかは、経典解釈の上でも未解明な部分が多く研究課題は多い。
- (14) 松尾恒一「小松豊孝太夫記 いざなぎ流御祈禱資料(一)(二)(三)」(『儀礼文化』三一・三二・三三、二〇〇二・二〇〇三)、同「職能者の技術と呪術」増尾伸一郎ほか編『環境と心性の文化史 下巻』(勉誠出版二〇〇三)参照。
- (15) 森毅「修験山伏の世界と三浦命助」(『法制史研究』二四、一九七四)、深谷克己『南部百姓命助の生涯』(朝日新聞一九八三)
- (16) 日本学士院編『明治前日本薬学史 第一巻』(増訂復刻版 一九七八 井上書店)
- (17) 海老沢有道『南蛮学統の研究』(増補版 創文社 一九七八)
- (18) 服部敏良『室町安土桃山時代医学史の研究』(吉川弘文館 一九八二)。
- (19) 山崎幹夫『薬と日本人』(吉川弘文館一九九九)
- (20) 東野利夫『南蛮医アルメイダ―戦国日本を生きぬいたポルトガル人』(柏書房一九九三)。
- (21) 遠藤次郎・中村輝子「室町―江戸時代初期の金瘡書・南蛮流膏薬書『春林軒膏方便覧』に見られる軟膏の色(抄)」(『日本医史学雑誌』四九―、二〇〇三)、前掲註(3) 拙著

(国立歴史民俗博物館研究部)
(二〇〇四年五月二二日受理、二〇〇四年七月二二日審査終了)

Technology and Magic as Seen in the “Teppo no Daiji” and “Nanban School Book of Secrets” from the Period of Transition in the Middle of the Early Modern Period

IHARA Kesao

This paper introduces a new historical document called the “Teppo no Daiji” (“Gun Manual”) newly discovered in a collection at Morita Shrine in Nagano City together with historical documents entitled “Nanban-ryu Hiden Ichiryu” (“Nanban School Book of Secrets”). It also investigates the correlation between techniques and magic during the Middle Ages.

First, “Teppo no Daiji” is a collection of a total of 15 documents dating from 1591, 1594, 1596, 1605 and 1615. It dates from virtually the same period as material on blending gunpowder dating from the late 1550s through to the early 1590s that had until now been considered the oldest of its kind. As materials that show the changes that occurred during the time leading up to the period of transition at the beginning of the Edo period (from mid 1590s to early 1620s) they are indeed rare materials. What is more, as historical materials that are older than a book of secrets on the art of guns written by a gunsmith who was contracted to a feudal lord that had been known about earlier, they are the oldest and first writings on the art of guns by practitioners who bequeathed them to a temple or shrine situated on private land.

Second, “Nanban-ryu Hiden Ichiryu” was bequeathed with “Teppo no Daiji” as a set, and instead of being a record of the art of guns according to the Nanban school, it contains details of methods for treating soldiers injured in battle. It turns out that writings on gun techniques and medicine were handed down and disseminated as a set. Stitching techniques and surgical methods are given as methods for treating injuries. In addition to details of Portuguese medicine, there are strong elements of the method for treating wounds caused by swords that was developed independently in Japan during the Muromachi period, suggesting a mixing of these two types of medicine.

Third, the transmission of technical and chemical knowledge on such things as blending gunpowder and making ointment from the “Teppo no Daiji” and “Nanban-ryu Hiden Ichiryu” is mysticized and ritualized by the use of magic and ritual so that it also possesses a magical dimension. There is an abundance of technical elements in the materials dating from the Tensho and Bunroku periods of the mid 1570s through the mid 1590s that are closer in time to the Sengoku period when practical fighting methods were adopted. They also reveal a reverse phenomenon in that in the documents dating from the Keicho and Genna periods at the end of the 16th century and beginning

of the 17th century when early modern society was developing in Japan, there is a stronger magical element.